

方形周溝墓研究と近畿弥生社会復原への展望

－瓜生堂遺跡ほか河内湖周辺における弥生墓制の位置づけ－

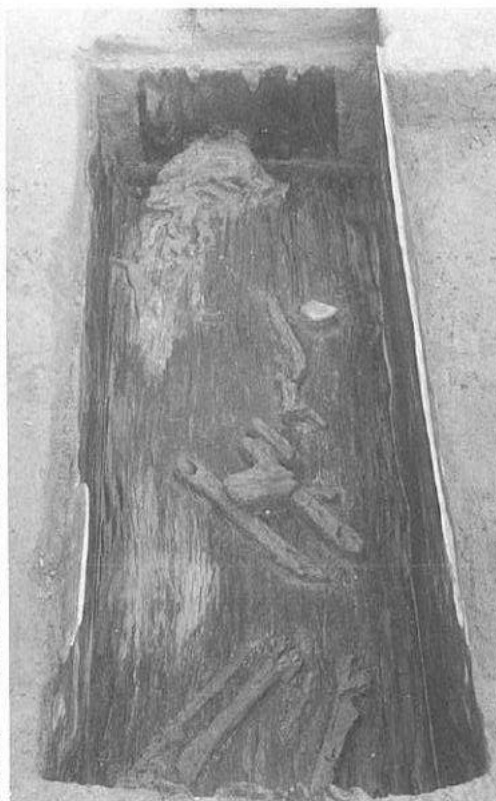
中村大介・秋山浩三

1. はじめに－方形周溝墓といえば瓜生堂遺跡－

高校の教科書に瓜生堂2号墓の写真(写真10)が繁用されていたことが顕示するように、近畿弥生墓制の代表格・方形周溝墓の全容をはじめて解明した点で、瓜生堂遺跡の研究史上における位置は不動である。酒井龍一らもかつて絶讃した(酒井1985)とおり、発掘調査の過程で誤謬を犯すことなく、凸状墳丘部をふくめ見事に方形周溝墓の構造を明らかにした当時の調査者の功績は末永く銘記されてよいであろう。基本的にそれまでは遺構として二次元的な理解だったものが、瓜生堂以降は三次元的な研究の展開が可能になったといえる。それだけでなく、弥生墓制のイメージをビジュアルに、しかも人骨の遺存もあったことから一種の親近感をともない、一般市民の脳裏にも説得性をもって刻銘された。このように歴史教育上の重要な考古資料になりえた、という側面にも大きな意義があったといえる。筆者(秋山)も約30年前に2号周溝墓を実際に目にした折りの、素朴な感動や迫力が今も鮮やかに甦ってくる。



墳丘と主体部(東から)



4号木棺(西から)

写真10 瓜生堂2号方形周溝墓の検出状況

さて、瓜生堂遺跡では本章第2節で示したように、これまで100基近くの方形周溝墓が発見されている。本報告の発掘でも10基以上の新例を加え、遺跡北東域での墓群のあり方を一層明らかにすることができた。

今回の調査地一帯における墓域の様相をあらためて簡単に要約しておくと、(1)方形周溝墓（一部円形周溝墓を含む）と土器棺墓で構成され、(2)方形周溝墓には墳丘規模の大小がみられ、(3)そのうち埋葬主体が判明した例では木棺墓、土壙墓、土器棺墓が採用され、(4)1周溝墓では複数埋葬を示し、(5)木棺の構造はおおむね統一的で、(6)供献土器が比較的多くみられ、(7)それには穿孔をもつ例が多い。これらの諸要素は、概括・総論的には近畿弥生墓制の普遍的な特質・現象におさまる。要するに、今回の成果はこれまでの“普遍性”の範囲内にあることになる。

しかし、本遺跡周辺の同じ河内地域内、さらに近畿全体等の方形周溝墓諸例を概観すれば、あるものは単独主体部であったり、木棺の型式構造が異なったり、供献土器やその穿孔個体を欠如するといった、各集団墓制（方形周溝墓群）は、それぞれに普遍性に則らない様相をも兼ね備えるのが実態である。いふなれば、上記したような普遍性のなかに“特殊性”が潜在する。墓域を構成する諸要素のうち、“有”の要素を列挙すれば多くは一般性のなかに収斂し、反対に“無”ないし“非”の要素を積極的に評価すれば個性が浮き彫りになってくる。このような普遍性と特殊性が織りなす複合体として、これまでの近畿弥生墓制の一般的イメージが形成されてきたわけである。

そのような意味において、今回の発掘成果である“普遍性”自体の位置づけをあらためて問い直してみること、表現を変えれば何故に普遍性を形成したのか、さらには、普遍性のなかに埋没し従前あまり顧みられることがなかった“特殊性（個性）”の意味を考究することにも、一定の意義があると考えられる。そこで本稿では、まず、これまで確認されている近畿地方を中心とした方形周溝墓とその諸属性の集成・整理を目的とした作業を実施する。そして、その成果データを基礎とし、方形周溝墓の調査研究史をふりかえりつつ、上記した普遍性と特殊性の織りなす“アヤ”を手がかりにして、近畿地方の弥生社会復原への展望に関する模索を試みたい。

2. 方形周溝墓の研究史と問題の所在

方形周溝墓は1960年前後に墓であるという認識が得られたのち（田辺1958、大場1965）、発掘例の増加によって、今日では近畿地方の弥生時代の中心的な墓制であることが判明している。その近畿地方の方形周溝墓の様相は早くも1975年に鈴木敏行によってまとめられ（鈴木1975）、主にそれ以後、親族構造の想定、階層化の進展を問題とした論文が多数みられる（都出1970、澤田1980、岸本1987、ほか）。特に階層化の研究については、大庭重信によって、具体性をもって近畿地方における方形周溝墓の様相と階層性の程度が述べられており（大庭1999）、この方面における一つの到達点が示されている。

一方、発掘事例の増加と研究の進展から、供献土器や埋葬施設を含む方形周溝墓の諸要素の理解は深められていったといえるが、当初からの研究対象である親族構造の想定には若干の問題も残る。1980年代を中心に世帯や家族、さらには夫婦という単位が方形周溝墓に求められてきたが（岸本1987、藤沢1987、都出1986、ほか）、その認定は周溝墓内にみられる木棺・土壙の配置と、人骨からみた男女の存在からのみであり、それらに対する血縁関係などの分析は皆無のため、根拠に乏しい一面をもっている。

また、かつて藤沢真依が滋賀県服部遺跡の主体部が単数しかない例をあげて指摘したように、同じ方形周溝墓であっても、河内地域周辺の多数の主体部をもつものとは差異がみられ（藤沢1987）、明らかに

墳丘内の埋葬施設の数において、近畿地方の方形周溝墓には地域差がみられる。しかし、藤沢の指摘以来、この方面の研究は進展していない。そこで本稿では、方形周溝墓とその社会を考える基礎作業として、瓜生堂遺跡に代表される河内地域の方形周溝墓を構造的に分析し、部分的ではあるが、河内周辺を含めた他地域の周溝墓と比較することで、地域性とその社会における意味を考察したい。

なお、今回分析に使用するのは、地域間の比較が可能な埋葬施設の数と、多くの埋葬施設に採用される木棺墓の形態、広い地域で確認される穿孔土器である。その様相を、河内地域（表23）を中心に、摂津地域（表24）、山城地域（表25）、大和地域¹⁾（表26）、播磨地域の玉津田中遺跡（表27）、近江地域の服部遺跡（表28）、尾張地域の朝日遺跡（表29）の順で本稿末尾の各表にまとめた。以下では、今回集成したことで判明した事実を述べ、最後にこれまで蓄積されてきた研究史を検討しつつ考察を深めてみたい。

3. 埋葬施設の変化

（1）埋葬施設数

方形周溝墓には、瓜生堂遺跡の小阪ポンプ地点の2号墓（写真10、図414）がその端的な例であるように一つの墳丘に多数の埋葬施設（主体部）をもつ複数主体部のものと、服部遺跡の多くが該当するような墳丘の中心に埋葬施設（主体部）が一つしかない単数主体部のものがある。

近畿地方では前者が顕著な例としてあげられ、方形周溝墓を家長の中心性（中枢）を含んだ（累計的な）家族、世帯墓とする考えが多く、一つの墳丘に単数の埋葬施設しかもたない河内地域の山賀遺跡などにも注意が払われつつも、この特徴は方形周溝墓の成立時からのかたちであるとされていた（藤沢1987、岸本1987、ほか）。しかし、これらの想定には、①多数主体部が方形周溝墓の当初からの葬制である、②多数主体部の存在を含め、方形周溝墓の様相は家族、世帯を反映している、という二つの問題が含まれている。これらの問題について否定的な見解も提出されてはいるが、今日でも根強く家族、世帯墓としての方形周溝墓観はみられる（寺澤2000、福永2001、ほか）。①、②の問題は不可分なものとして扱われる傾向にあるが、まずは、①の事実関係を整理し、今回集成した事例からどのように考えられるかを叙述したい。②については最後にすべての様相を検討した後に述べることにする。

①については、すでに近畿地方から関東地方までの周溝墓の中心主体にくる未成人の存在などを検討した大村直が、家長を中心とした家族墓説に対して否定的な見解を示し、主体部も単数から多数へ変化することを想定している（大村1991）。さらに、大庭重信は墳丘上の埋葬配列を、単数主体部のものを「単数型」、多数主体部のものを「空間占有型」と「空間分有型」に区分し（本稿の表23～29でもこの区分を援用した）、おおむね「単数型」中心から「空間占有型」と「空間分有型」中心へと時間的に移り変わることを示している（大庭1999）。

以前は弥生前期の方形周溝墓には、摂津地域の安満遺跡²⁾、和泉地域の池上遺跡³⁾（池上曾根遺跡）などの主体部が不明瞭かつ、詳細な様相が検討しがたい資料しかなかったが、1993・94年に摂津地域で前期後葉の方形周溝墓である東武庫遺跡が発掘され、主体部の検出された周溝墓の多くが、中心に単数の木棺を主体部とするものであることが判明した⁴⁾。東武庫遺跡でも前期末に下る周溝墓の主体部が3基の可能性のあることから、比較的早い段階に多数主体部の萌芽がみられることには注意しなければならないが、前述の第Ⅱ様式の山賀遺跡の例とあわせて、初期の方形周溝墓が単数主体部を中心とするものである可能性は高い。また、これらに付け加えるならば、方形周溝墓の伝播の様相も参考となりえる。すなわち、東日本への方形周溝墓伝播の初期様相において、東海・関東地方では単数主体部が中心的に

みられ、溝中埋葬はみられないことも、発信地である西日本の方形周溝墓が本来的に単数主体部であったことを示唆する事例と考えられる。遺構としての残りのよい静岡県瀬名遺跡⁵⁾においても単数主体部が主流で溝中埋葬が認められないことは、これを傍証する確実な類例である。

以上により、全体的な様相では、当初は単数主体部が主体的に存在し、後に多数主体部が中心的となる様相が再認識できた。しかし、こうした動態のみられる近畿地方であるが、より詳細にその内部での様相を考察したものではなく、それが全体的なものであるのか、地域性を示すものであるのかという論及はなされていない。そこで、次に近畿地方各地域の一墳丘の埋葬施設の数の様相について検討したい。

河内地域の方形周溝墓を検討すると、第Ⅱ様式¹⁾の山賀遺跡は単数主体部であるが、第Ⅲ様式以降、瓜生堂遺跡の諸地点、亀井・城山両遺跡など、多くの墓域で多数主体部が現れる。そして、瓜生堂遺跡の諸地点、城山遺跡に顕著にみられることであるが、墳丘規模が大きく、多数主体部のものは墓域のなかでもまとまる傾向にあり、同じ墓域でも地点をちがえて、小規模で単数主体部のものが集中する傾向にある(表23)。なお、生駒山西麓地域の鬼虎川遺跡では第Ⅱ様式から造墓されるが、第Ⅳ様式にいたっても多数主体部にならない。

他地域については、摂津地域でも河内湖周辺にあたる地域では、勝部遺跡などで、多数主体部で一墳丘に5基以上の主体部をもつ河内地域と同様の方形周溝墓がみられるが、摂津地域でもそれ以外の地域や山城地域においては単数主体部が中心的であり、多数主体部でも3基以内のものが大多数である。これらの地域では全時期を通して単数主体部が大部分であるが、第Ⅲ～Ⅳ様式に入ると多数主体部が現れはじめる傾向にある。ただし、主体部が多数化しても河内湖周辺の河内地域や摂津の一部地域以外と比較して、一墳丘における埋葬施設の数は少ない。なお、大和地域については、大和盆地北部の第Ⅱ～Ⅲ様式の端境期にある柏木遺跡において、単数主体部がみられるのみであり、時間的な変化やその南部地域の様相についてはわからない。和泉地域では池上曾根遺跡の97-3区において5基の埋葬施設をもつ方形周溝墓2基が近接して存在している(図409)。これは池上曾根遺跡の方形周溝墓群のなかでも最大級であり、第Ⅳ様式には河内地域に近い様相となっていた可能性を示唆する。

以上のことから、多数主体部は特に近畿地方のなかでも河内湖周辺地域の特徴であることがわかる。时期的には大村直や大庭重信が指摘するように第Ⅲ様式以降にそれが顕著となるようであり(大村1991、

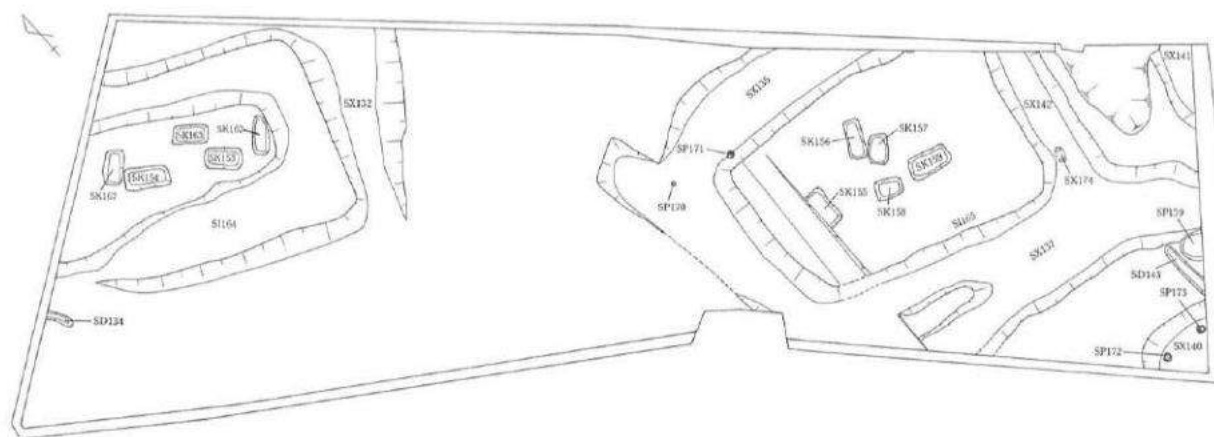


図409 池上曾根遺跡(和泉)の方形周溝墓

大庭1999)、その他の地域でも同様の時期に多数主体部化が現れる可能性があるが、前時期からわずかながら多数主体部も存在するため、新たな変化かどうかは判然としない。むしろ類例は少ないながらも、近畿地方においては河内地域で顕著にみられる墳丘拡張の事例が、山城地域の神足遺跡、摂津地域西部の楠・荒田町遺跡でみられ、両者とも第Ⅳ様式の多数主体部の例であることから、他地域では遅れて、多数埋葬化が達成された可能性もある。

一方、同じ複数埋葬であっても、丹波地域の池上遺跡のように、区画内に並列的に多数の主体部を配置していく周溝墓もみられる(図410)。しかし、同じ丹波地域でも余部遺跡や七日市遺跡では池上遺跡のような様相は示しておらず、近い事例は、播磨地域の長塚遺跡の周溝墓にみられる⁶⁾。埋葬施設の数やその配置方法は、河内地域のように一定のまとまりのみられる地域もある一方で、墓域を構成する集団ごとの特性が目立つ場合もあるようである。

(2) 木棺型式

木棺型式の研究については、福永伸哉によって明瞭な分類案が提示され、大きくⅠ型、Ⅱ型、Ⅲ型に分類されている(福永1985)。Ⅰ型木棺は、小口板を墓壙底部に突刺して固定し、それを軸として木棺を組む。Ⅱ型木棺は、小口板を木棺の底板の上にのせ木棺を組む。そして、Ⅲ型木棺は、墓壙の小口の側板を差し込むことによって側板を固定し、それを軸として木棺を組む型式である(図411)。なお、近畿地方で検出される木棺はⅠ型とⅡ型が大部分である。

瓜生堂遺跡に代表されるように方形周溝墓や木棺墓群にⅠ型、Ⅱ型の型式が混在することに対する解釈として、春成秀爾は他地域からの婚入者がⅠ型木棺を使用し、Ⅱ型木棺よりもランクが下であるという想定をした(春成1985)。また、福永伸哉は摂津地域のどこかにおいて、Ⅰ型木棺を主体的に使用する地域があると想定し、河内地域ではⅡ型木棺を主体とするため、これらの婚姻関係で木棺型式が瓜生堂遺跡などにおいて混じりあうという結論を導いた。地域と出自を一致させ、地域ごとの集団に固有の木棺型式が存在するという理解を示した点に特徴がある(福永1985、同1991)。また、田中清美は近畿地方の木棺墓を検討し、Ⅱ型木棺が階層的に上位とする一方、Ⅰ型木棺は時期的に古いものが多い可能性を示した。さらに上位と考えられる

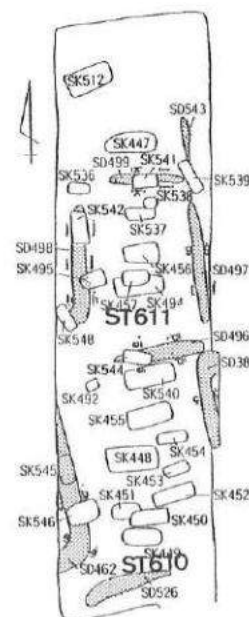


図410 池上遺跡(丹波)の方形周溝墓

	模 式 図	典 型 例
Ⅰ型		 京免遺跡 SC93
ⅠB型		 瓜生堂遺跡 9号周溝墓 1号木棺
Ⅱ型		 馬部遺跡 6号木棺墓
Ⅲ型		 下通山遺跡 No.120土坑 (福永1985を改変)

図411 木棺の諸型式

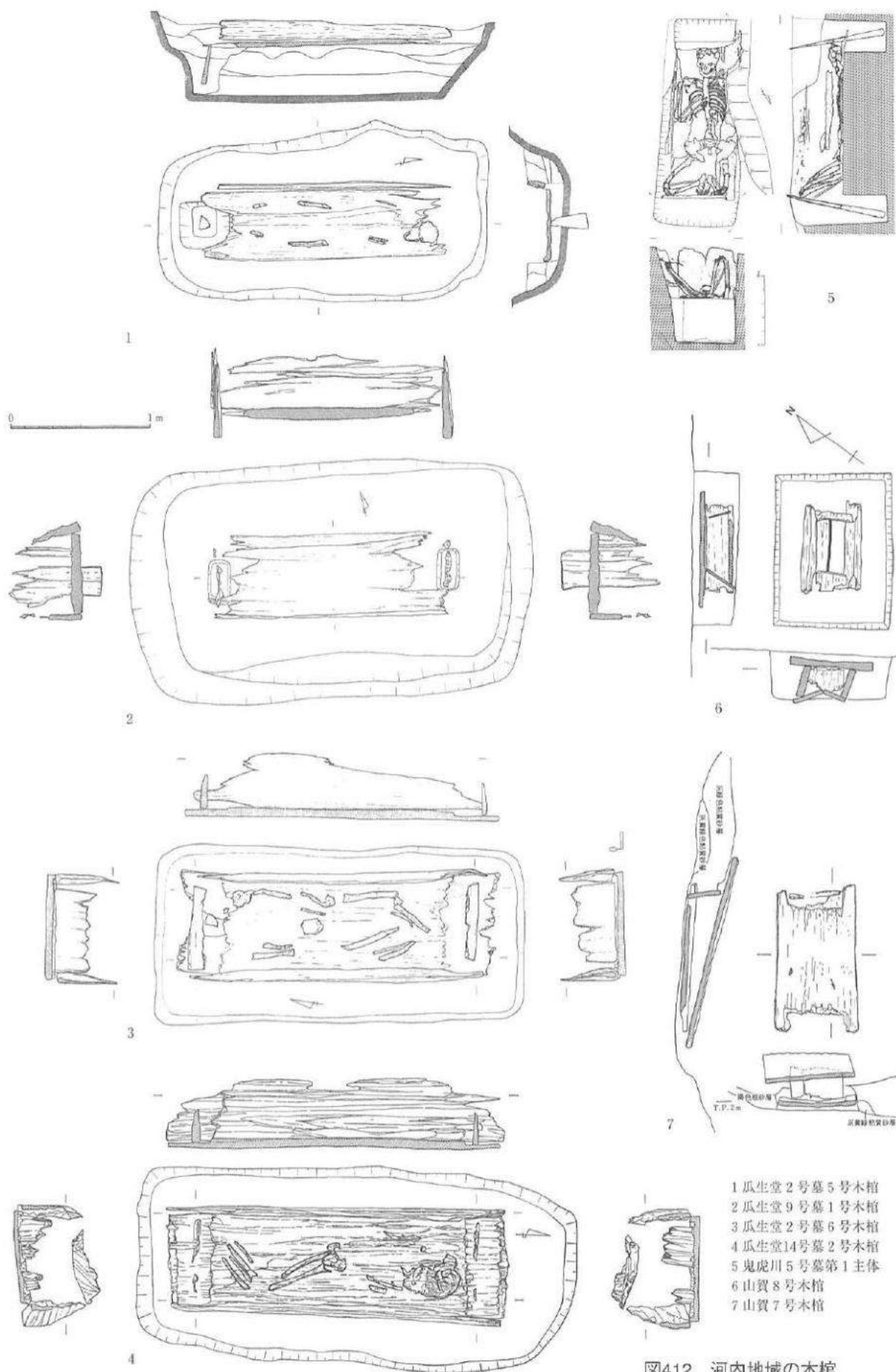


図412 河内地域の木棺

ものにはⅠ型、Ⅱ型に共通してコウヤマキが使用されることを指摘し、木棺型式、木材樹種の差異に階層差をみている（田中1994）。以上のような先行研究を考慮し、木棺型式の示す意味について考えてみたい。

瓜生堂遺跡の木棺は今回の調査を含めて、そのほとんどがⅡ型木棺である。一方、福永分類においてもⅠ型木棺には小口の形態に多様性がみられるように、2基ほどある瓜生堂遺跡のⅠ型木棺はすべて、底板、小口板ともに加工を必要とする型式であることがわかる（図412）。鬼虎川遺跡などの第Ⅱ様式を中心としてみられるⅠ型木棺は小口を墓底面に差し込み、それを中心に木棺を組み上げるというやや粗放な一面をもつものであるが（図412）、瓜生堂遺跡のものはそれより幾分洗練されているといえよう。今回、これを仮にⅠB型とする。この形態の小口は第Ⅱ様式の山賀遺跡においても存在し、さらにその前段階ともみられるⅡ型木棺も、方形周溝墓ではない7号・8号墓の木棺に存在する。この木棺の小口板はT字形に加工され（図412）、底板も、それがはまるようにコの字形に切られているが、墓底面に小口板を突き刺した様子はない。この事例が最古例であることから、ⅠB型は単純にⅠ型木棺の系統からだけでなく、8号墓木棺にみられるようなⅡ型木棺の小口と底板の組み合わせ方法に影響されて成立したものであるといえるだろう。したがって、これを前期からみられるⅠ型木棺と同列のものとは単純にはみなせない。

ここで、木棺型式の時間的な変遷について少し整理したい。Ⅰ型木棺とⅡ型木棺は弥生時代の前期にはすでに存在し、松山平野をのぞいた中四国から近畿地方では60～80%でⅠ型木棺が採用されている⁷⁾。第Ⅱ様式においても山賀遺跡にはⅠ型が多く、近畿地方においては全体的に第Ⅱ様式後半から第Ⅲ様式前半にかけて、Ⅱ型木棺が主体となってくる傾向がみられる（表23）。つまり、当初からある2つの木棺型式が時間の経過とともに、Ⅱ型木棺が主体となるという動態を示している。このことからⅠ型木棺の採用については、地域差よりも時間差に大きく起因するものであるといえるだろう。この結果は田中清美が指摘したことに合致する（田中1994）。

ⅠB型木棺は摂津地域の勝部遺跡にもみられ、多数埋葬の方形周溝墓にⅡ型木棺に混じってみられるという点は、河内地域の瓜生堂遺跡と共通する。これがどのような要因で採用されたかについて明瞭な答えをみいだせないが、少なくとも、それまでのⅠ型木棺とはちがう型式であり、それを主体的に採用する地域も第Ⅲ後半～第Ⅳ様式にはみられないことから、木棺型式が地域やそれに固定された集団に固有のものであるという見解には否定的にならざるをえない。木棺型式が階層構造や出自集団⁸⁾など、社会内の区分の一端を示している可能性はあるが、人骨などの検討を経ない現状では明瞭な解釈は導きがたい。さらには木棺型式が混じりあうのは弥生時代前期～中期第Ⅲ様式前半がピークであり、それ以後にはⅡ型木棺がどこでも主体的に採用されていることから⁹⁾、社会内の区分を示していたとしても、第Ⅳ様式前後においては、その区分の構造も変化している可能性がある。

ところでこのⅡ型木棺は、木材が遺存している事例からは少なくとも滋賀県にまで広がっており、河内・摂津地域などと共通した様相をみせる。第Ⅲ～第Ⅳ様式にみられるこの木棺は木材の厚さが10cm以上であり、これは九州で木棺痕跡から想定されている5cm程度という棺材の厚さよりも厚い¹⁰⁾。実際に前期中葉の島根県堀部第一遺跡¹¹⁾の木棺の厚さは5cm程度であり、近畿地方でも東武庫・山賀両遺跡の木棺材の厚さが5cm程度のものであることを考えると、後の近畿地方の木棺は棺材を厚くする方向に向かっていったといえ、小口板と底板との組み方に多様性が認められるものの、Ⅱ型木棺という企画性が高く、厚く立派な木棺を指向していたと考えることができる（図413）。東海地方などの様相は木棺の残

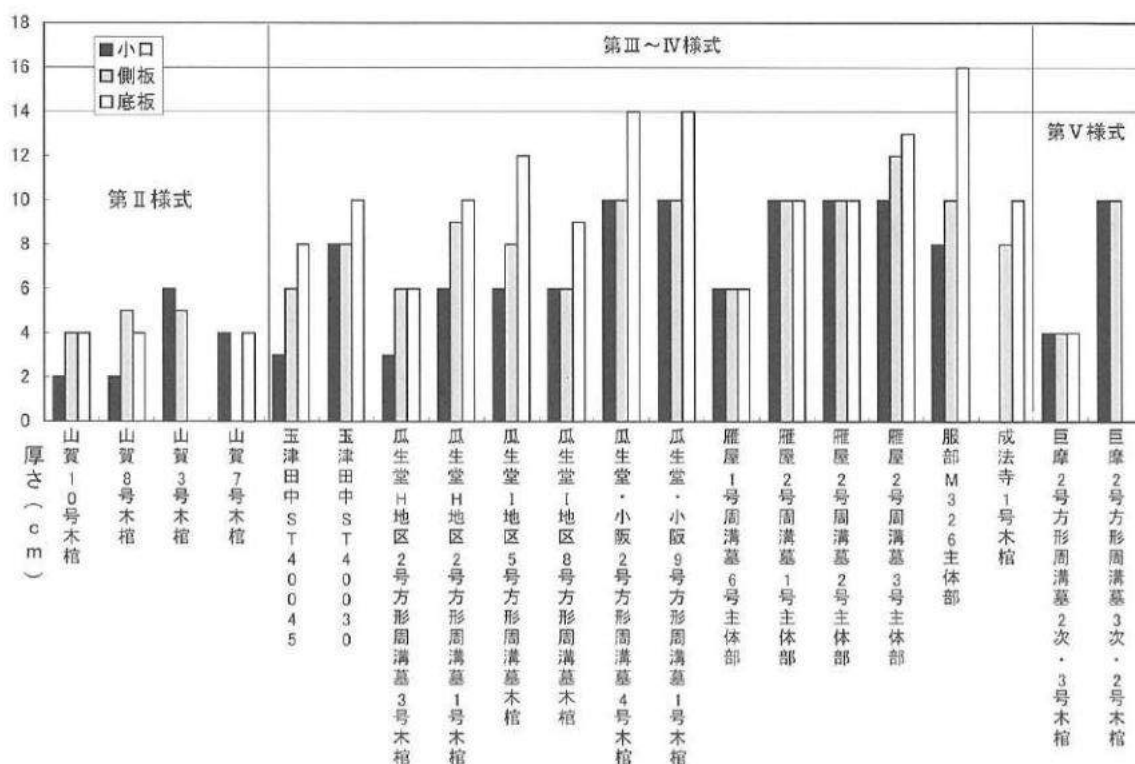


図413 近畿地方におけるⅡ型木棺の棺材厚の推移

存がみられないため不明瞭ではあるが、少なくとも玉津田中遺跡から服部遺跡までみられるように、近畿地方全体に、木棺型式とその変化の方向を同じくする共通性があったことは無視できない。

4. 供献土器と体部下半穿孔

弥生時代には、ほぼ全時期を通じて体部下半に穿孔を施した土器がみられる。その解釈については「器としての実用を否定して仮器とする」考えが主なものである（勝部1976、ほか）。近畿地方においては田中清美は集落を含めた穿孔土器の検討をおこない、墳墓だけでなく、集落遺跡からもそうした土器が弥生時代前期からみられることを指摘している（田中1988）。

穿孔土器自体は土器棺や河川・井戸などの様々なところでみられる。ただし、それが方形周溝墓における祭祀行為として取り入れられる時期や、その採用の地域差などについてはほとんど論及されていないようである。弥生時代前期の墓にともなう例としては、九州北部の長崎県宇久松原遺跡¹²⁰、福岡県横隈上内遺跡¹²¹や、兵庫県東武庫遺跡にみられ、いずれも壺がその対象となっている。特に東武庫遺跡の例は方形周溝墓であることは注目される。弥生時代中期の方形周溝墓においては、少なくとも西は播磨地域、東は尾張地域にみられる。本報告の1999年度瓜生堂遺跡調査でも多数の穿孔された供献土器（本書図127・128ほか参照）が出土したように、河内地域はその主体的な地域であり、他地域の様相と比較してどのようなものなのかを明らかにすることで、瓜生堂遺跡をはじめとする河内地域の方形周溝墓の特性を明確にできるだろう。穿孔土器の有無は土器の残存度合に大きく左右されるものであり、本稿の表23～29で示した資料のなかには必ずないとはいいい切れない例も含むのは事実であるが、多くの資料を扱うことで、大略的な傾向は把握できるものと考ええる。なお、本来ならば、口縁部打ち欠き事例についても同様に扱うべきだが、これについては意識的におこなわれたものであるかの認定が難しいため、今

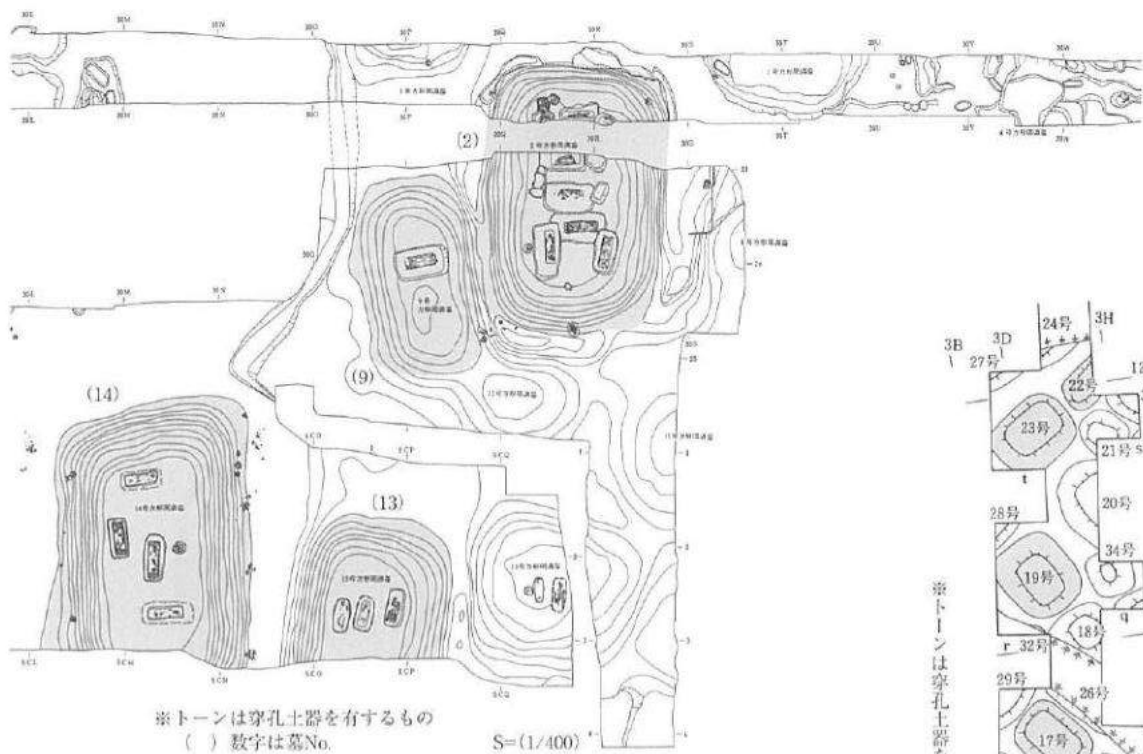


図414 瓜生堂遺跡小阪ポンプ場地点の方形周溝墓と穿孔土器

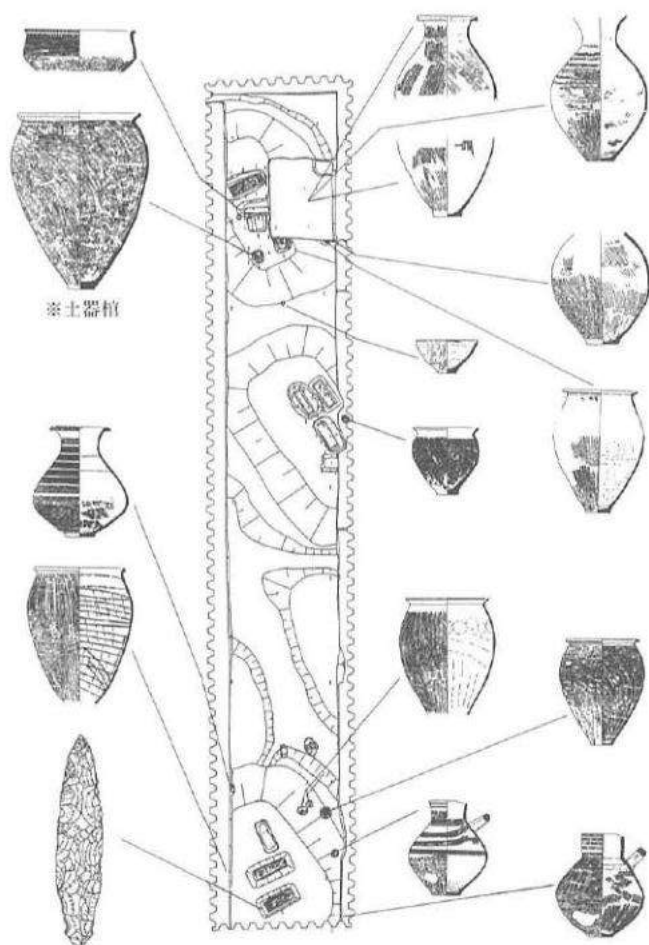


図416 瓜生堂遺跡47-2次D区（東大阪教育委員会調査）地点の方形周溝墓と穿孔土器

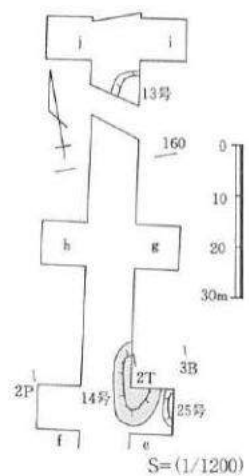
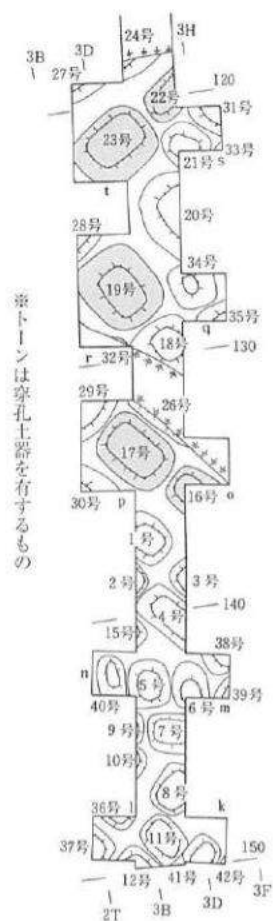


図415 城山遺跡の方形周溝墓と穿孔土器

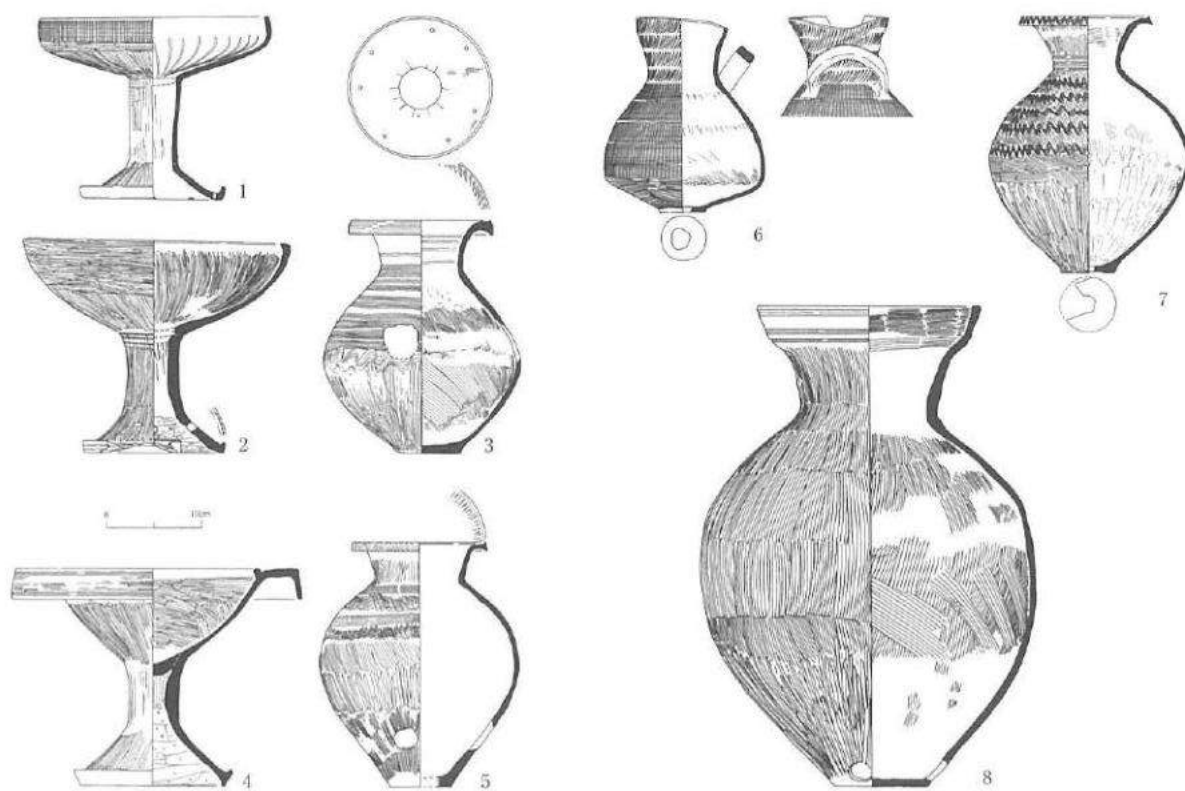
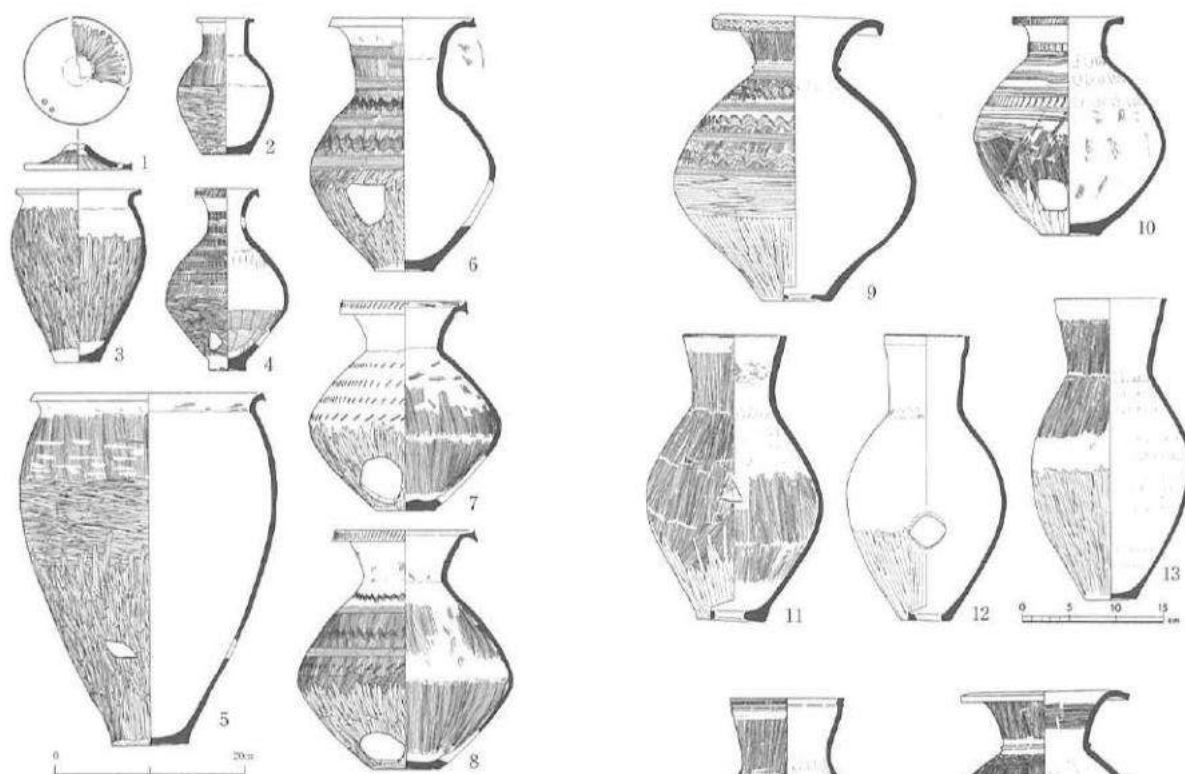


図417 穿孔形態の多様性-1 (瓜生堂遺跡42次)

1～5 1号方形周溝墓供献土器
6～8 6号方形周溝墓東溝供献土器



1～8 鬼塚8次方形周溝墓3南側周溝供献土器
9～13 雲井ST04出土土器
14 雲井周溝墓5供献土器
15 雲井周溝墓4供献土器

図418 穿孔形態の多様性-2 (鬼塚遺跡・雲井遺跡)

回は、規格性が高く認知しやすい体部下半穿孔を主な対象としたい。また、底部（面）穿孔については甕・壺ともにみられ、土器の組成としても弥生時代前期から一般にあるものであるため、実用の道具である可能性が高く、今回の検討から多くを除外した。ただし、甕・壺だけでなく、高杯や水差しと他器種を含み、底面に円形の大きな孔が認められる穿孔形態のものは確かな底部穿孔の例である。この事例については数例しか認められなかったが、体部下半穿孔とあわせて以下において解釈を試みたい。

河内地域では瓜生堂遺跡をはじめとして、方形周溝墓の検出された遺跡ではほぼすべての地点に穿孔土器が存在するように思われる。ただし、生駒山西麓地域をのぞいて、現状で第Ⅱ様式以前の事例については明確には確認できない。生駒山西麓地域の鬼虎川遺跡では第Ⅱ様式の例として広口長頸壺に2例ほどみられ、これは生駒山西麓地域でもより南部にある恩智遺跡の副葬土器と共通する。これらの事例が示していることは、生駒山西麓地域が穿孔土器の発信地であるということではなく、東武庫遺跡の前期の例も含めて、むしろ、第Ⅱ様式までの墓から出土する穿孔土器は、広い地域でみられるものの（表23～29）、河内地域も含めてそれほど定着的ではなかったということである。また、この時期までの供献土器は、その量自体が少なく、生駒山西麓地域も含む河内地域では第Ⅲ様式以降に増加する。これには主体部多数化の進展がある程度関係していると考えられるが、前述したように鬼虎川遺跡では主体部の数はそれほど変化がないことから、一回の儀礼における土器の使用量もまた増加の傾向にあったことがうかがえる。

第Ⅲ様式から供献土器が増加し、その新相から第Ⅳ様式にかけて、供献土器の器種もまた豊かになり、特に水差しが顕著にみられる。穿孔も壺だけでなく、高杯・甕・台付鉢・水差しにもなされるようになる。壺・甕・水差しは実際に煮沸に使用したようであり¹⁴⁾、その胴部下半に穿孔することは、土器の実質的な機能を停止させる意味をもつが、高杯や台付鉢は供膳具であり、それらを固体に使用する場合は、穿孔による実質的な効果はない可能性がある。これらの器種に穿孔がなされるようになる時期こそ、象徴的な儀礼行為として土器穿孔が確立された時期であるといえるのではないだろうか。

次に、穿孔土器がどのような方形周溝墓にともなうのかについても考えるとともに、穿孔の差異についてもふれてみたい。瓜生堂遺跡においては小阪ポンプ場地点に穿孔土器が集中し、そのなかの最も小さな10号墓には供献土器も少なく、穿孔土器も含まれていない（図414）。同遺跡の近畿自動車道A～J地点では供献土器は多いものの、穿孔土器はわずかしかない。しかし、この墓域の南端に含まれる巨摩遺跡の11号墓においては大量の供献土器とともに、穿孔土器も多く含まれる。この方形周溝墓は全体がわからないが、墓域のなかで大きく主体部の数が最も多いようである（表23）。瓜生堂遺跡の東大阪市教育委員会47-2次D区調査地点では、それほど規模の変わらないと考えられる方形周溝墓が3基並んでおり、そのなかの2基は供献土器の様相がよくわかるが、うち1基にのみ穿孔土器が含まれる（図416）。一方で、今回の瓜生堂遺跡1999年度調査地点では墳丘規模に関係せず、多くの方形周溝墓に穿孔土器がともなうようである。河内平野でもより南に位置する城山遺跡では、墳丘規模の大きいものに穿孔土器がともなう傾向がある（図415）。しかし、大形墳丘墓である加美遺跡Y1号墓では大量の供献土器に多くの穿孔土器が含まれる一方（田中1997）、小形ともいえる加美遺跡の他の方形周溝墓にも、比較的多く穿孔土器が含まれる状況がみられる¹⁵⁾。

加美遺跡の南に位置する長原遺跡（NG03-5次）においては、明らかに体部下半ではなく、底部に穿孔したものだけが、壺・高杯・台付鉢と器種を問わずまとまって出土している¹⁶⁾。瓜生堂遺跡として認識される最も北西地域に位置する東大阪市教育委員会42次調査地点においても、底部穿孔が多く含まれ

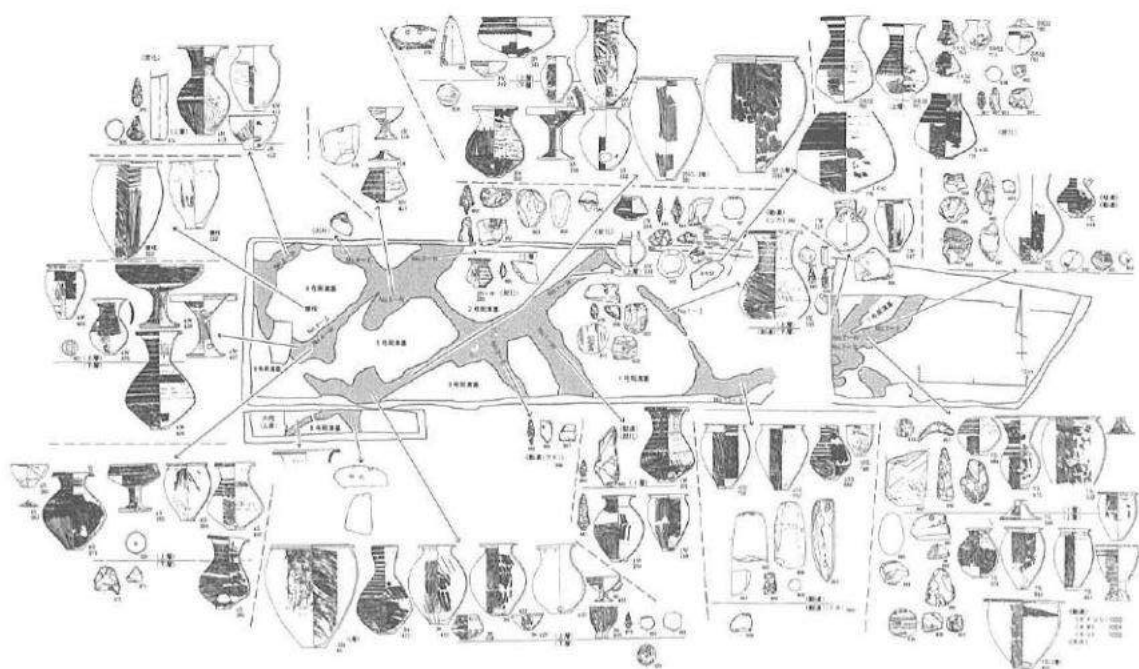


図419 西ノ辻遺跡の方形周溝墓と供献土器

ており（図417）、長原遺跡例とはちがって、体部下半穿孔も混じりあっている。壺・甕には両者がみられるが、水差し・高杯は底部穿孔のみであることから、緩やかながらも器種による穿孔の区別があったのかもしれない。生駒山西麓地域の鬼塚遺跡では、摂津地域からの搬入された広口壺に、径の大きな穿孔がなされており、これは摂津地域西部の雲井遺跡などの穿孔形態と類似する（図418）。

これらの様相を考えてみた場合、瓜生堂遺跡における穿孔土器は各地点での周溝墓のまとまりごとに、穿孔土器が表している意味が多少ちがっていた可能性もある。例えば、小阪ポンプ場地点と城山遺跡の例は、供献土器の量も含めてではあろうが、そのなかでの階層性を反映していると考えられ、ほぼすべてに穿孔土器をとまうような西ノ辻遺跡（図419）、墳丘規模が小さいものにもそれが入る亀井遺跡などにおいては、階層性を反映するものではなく祭祀の一環にとどまるような様相を示している。また、底部（面）穿孔がまとまる例などがみられることも加味すれば、穿孔という儀礼行為の規律は、それぞれの方形周溝墓を営む社会集団ごとに異なっていたことを示唆しているといえるだろう。

次に、以上のような河内地域での様相をより理解するために、周辺地域の様相について考えてみたい。藤井整が指摘しているように、山城地域の下植野南遺跡においては、完形に復原できる土器があるにもかかわらず、穿孔土器がみられない（藤井2001）。同様のことは丹波地域の池上遺跡、大和地域北部の柏田遺跡などにもみられ、全体がまだ不明瞭ではあるが、山城地域の市田齊当坊遺跡にもその傾向があるようである。山城を中心とする地域においては、神足遺跡のように、数は少ないながらも、第Ⅱ様式から穿孔土器がみられるものもあり、遺跡ごとの差異も確かに存在するが、穿孔土器を方形周溝墓の祭祀に主体的に取り入れなかった可能性がある。一方で大和盆地南部の唐古・鍵遺跡を中心とした地域では第Ⅱ様式から穿孔土器がみられ、第Ⅳ様式まで継続的にそれを採用している可能性がある。尾張地域の朝日遺跡においては、近畿地方の第Ⅱ様式に並行する時期から第Ⅲ様式を中心に後期にいたるまで継続的に穿孔土器を採用しているようである¹⁷⁾（表29）。このような状況をみると、全体的には、近畿地方で

も、山城を中心とする河内湖の北方では、方形周溝墓における穿孔土器の採用は非定着的であり、河内湖の東・南の地域では、それが比較的良好に採用されている。それは、400基近い方形周溝墓のある滋賀県服部遺跡において、多量の供献土器にもかかわらず、穿孔のある例が5点ほどであることから考えうることである（表28）。これらの事例は主に第Ⅱ～Ⅲ様式を中心とする遺跡が多いことから、過渡期にあたる部分をいくらか含む可能性もあるが、第Ⅳ様式にいたっても点的にしか穿孔土器を確認できない状況は、墓群単位でまとまってそれを確認できることがある河内地域と様相を異にすると判断することができるだろう。

第Ⅲ様式後半から第Ⅳ様式の河内地域においては、瓜生堂遺跡や城山遺跡における事例から、多量の土器が供献され、7個体以上もの土器に穿孔が施される事例までみられる一方、それ以外の地域では、朝日遺跡における加藤安信の指摘のように、墳丘一つに1～2個体の穿孔土器が一般的である（加藤1982）。この点も河内地域の地域性がよく示される部分としてとらえることができるだろう。なお、この数の問題については、鬼虎川遺跡の事例をのぞいて、やはり複数埋葬が関係している可能性が高い。

5. 河内地域の方形周溝墓と近畿地方の社会

（1）方形周溝墓の諸要素と多数主体部の解釈

これまで取り上げてきた方形周溝墓の様々な側面をここで整理してみたい。

まず、方形周溝墓という墓制自体は非常に広く採用されるものであるが、その個々の要素は地域によって異なる。一墳丘に造られる埋葬施設の数、河内湖を中心とした地域では第Ⅲ様式以降に多数化し、10基以上の主体部をもつものもみられるが、その他の地域では多数主体部のものであっても3基以下であり、その多くが単数主体部であることから、強い地域性を発現するものとしてとらえられる。一方で、埋葬施設である木棺はⅡ型木棺を中心とし、木棺そのものが確認できる例では滋賀県の服部・針江北両遺跡などで立派なⅡ型木棺が認められ、西方では兵庫県玉津田中遺跡で確認される。これは地域間をこえる広い分布を示す。穿孔土器は第Ⅱ様式には愛知県朝日遺跡で認められ、古い時期から広い地域で方形周溝墓に取り入れられたことがわかる¹⁰⁾。しかし、河内湖を中心とする地域以外は、墓域のなかでも穿孔土器の有無は散在的である。また、その供献土器の数や組成などは各地域において差異が認められ、第Ⅳ様式を中心とする河内・摂津地域では大量の土器を使用し、瓜生堂遺跡などにみられるように、その多くの土器に穿孔を施す例がみられるが、その他の地域では穿孔土器は1～2個にとどまる。さらに河内地域では墓域ごとではあるが、一定の規律があるようであり、大きな墳丘にしか穿孔土器を使用しない墓域が存在する可能性もある。穿孔土器自体は広くみられるものの、その取り扱いには地域内でも、墓域ごとに差異がみられると考えられる。

これらの様相の重なりは必ずしも明確ではないが、例えば、多数主体部と供献土器にみられる穿孔土器の多さが、河内湖周辺地域や和泉地域の一部において、強い相関性を示すことは、集団と儀礼行為の両者の結び付きを示していると考えられる。その意味で、この地域における地域的特性を最も強く象徴しているのは多数主体部の発現であり、これが示すところについて考えることは重層的な方形周溝墓の墓制の構造を理解する手がかりとなりえるだろう。

本稿では先項の3 - （1）において、多数主体部について①、②の問題点をあげておいた。①については研究史と今回提示した事例を参照すれば、方形周溝墓当初からの性質ではないといえるだろう。したがって多数主体部を単純に問題とした家族、世帯墓は成立しない。ただし、墳丘をちがえるだけで、群

集する周溝墓全体で家族、世帯を構成している可能性もありうる。その例としては第Ⅱ様式の山賀遺跡が相当し、単数主体部でそこに子供をもち、群全体で世帯のような様相を呈している。そこで、②の問題を検討する必要がでてくる。方法としては方形周溝墓から出土する人骨を歯冠計測、DNA分析などで検討することが最善の方法であるが、資料に乏しく直接、考察できない。したがって、間接的ではあるが、同時期の他地域、同地域の次の時代の研究を参照することによってその問題を考えたい。

方形周溝墓が特に盛行する弥生時代中期は、北部九州では甕棺墓が盛行しており、人骨の残りもよい。田中良行を中心に歯冠計測によって、親族構造を抽出する研究が進んでおり（田中1991、ほか）、さらには墓制が家族・世帯を表す可能性が低いことを指摘している（田中1998）。また、こうした人骨の分析の成果を援用し、溝口孝司は北部九州における墓域と被葬者像の様相の変遷をまとめている（溝口2001）。例えば、吉野ヶ里遺跡の墳丘墓被葬者は、首長の家族というような血縁関係のある人々でなく、甕棺墓群にみられるいくつかの集団の代表者のまとまりであることが指摘されている。近畿地方においては主に古墳時代を対象とするものであるが、清家章によって田中と同様の分析方法による親族構造の研究が進められており、墳墓にみられる同一墳丘の埋葬には夫婦に対応するまとまりは古墳時代にはないことが指摘されている（清家2002）。

方形周溝墓からの人骨に対する分析はないものの、このような、同時期の他地域の状況、同地域の後の状況などを考慮すると、近畿地方の方形周溝墓だけが夫婦、もしくはそれを含む家族、世帯で成り立っているとは考えがたい。集落の場において、堅穴住居などの住居址に生活する主体が夫婦を含む世帯である可能性は、民族誌の類例からも十分にありえるが、墓域においては上記のように再考を要するであろう²⁹⁾。民族誌にみられる社会組織はほぼ例外なく出自集団に基礎をおいていることから、現状においては、方形周溝墓の被葬者の示しているのが、最低限の理解ではあるが、出自集団であるリネージやクラン内の分節である可能性が高いといえる。

そこで、河内地域の社会を、以上のような脈絡で考えた場合、装身具が顕著にみられる加美遺跡Y1墓を頂点として考えるならば、リネージもしくはクランのなかの分節で構成された一族を大きな同一墳丘に葬り続けることこそ、社会のなかで力を保有しえたことを示す証であったのではないかと推察される。集落におけるクラン、リネージの分節を基礎としたエリート一族の台頭を基礎としたものが、方形周溝墓の多数主体部であり、瓜生堂遺跡をはじめとする河内湖沿岸の様相であったのであろうと考えられる。同一墳丘に一族を葬り続けることは、系譜を主張する方法であり、山賀遺跡のように一墳丘に一埋葬施設を作り、墳丘を連結させることからの変化を考えれば、河内地域の社会はその出自集団内の分節の結び付きを強化する方向にあったと考えることができるだろう³⁰⁾。また、第Ⅲ様式以降には土器棺が増加することから、それまでも子供の周溝墓における埋葬はみられたが、より年齢を広げて埋葬される傾向が生まれた可能性もある。その場合、より系譜性が主張されることを示す傍証となる。

これらのことをふまえて、先に述べた穿孔土器の墓域ごとのまとまりを考えるならば、それは個々の出自集団内部のまとまりが反映されるものとしてとらえられる可能性があり、さらに、穿孔という末端の部分ではあるが、儀礼行為における個々の差別化がみられるようになったことを示しているのではないだろうか。そう考えれば、儀礼行為という民族事例などで最も固有性が表れる部分と合致する。また、この出自集団をクランととらえるならば、地域を異にしてもそれが広がっている可能性がえられるため、考古事象において、池上遺跡（丹波地域）のような特異な多数主体部が他地域でみられることや、他地域の土器が供献されること、穿孔土器が墓域内でまとまる一方で地域をこえて共通した事例がみられる

ことなどに対する説明ともなりうる²⁴⁾。

(2) 近畿地方の弥生時代中期社会

近畿地方の方形周溝墓には副葬品が乏しく、すでに1970年には佐原真によって、装身具以外の品目の副葬習慣がないことが指摘されている(佐原1970)。また、その装身具さえも、摂津地域の田能遺跡で630点をこえる管玉があるものの、河内地域の加美遺跡で管玉・銅釦、播磨地域の玉津田中遺跡で30点程度の管玉が副葬されるにすぎず、遺物としての総量はもとより、遺跡数、遺構数としても少ない。一方、玉作りは大阪府寝屋川市高宮八丁遺跡で前期末から、同守口市八雲遺跡で第Ⅱ～Ⅲ様式、京都府久御山町市田斉当坊遺跡で第Ⅱ様式後半～第Ⅳ様式にかけてみられ、その他にも神戸市新方遺跡など、玉作りをしていた可能性のある遺跡はいくつかみられる。特に市田斉当坊では数百点の未製品がみられるが、それらの生産された管玉は、同時期の方形周溝墓には副葬されてはいない。

近畿地方の弥生時代社会における、二上山サヌカイトの流通や石庖丁の石材の潤沢な流通(蜂屋1983、本章第8節、酒井1974、秋山2003、ほか)、副葬用としてではない碧玉製管玉の生産を考えてみた場合、近畿地方の社会はその内部の交易が極めて活発であり、そうした活動が社会を支える重要な側面であったことがうかがえる。交易を担うことがその社会集団内の優位性を保証する事例はよくあることだが、これを近畿地方の様相にあてはめた場合、先に検討した瓜生堂遺跡や加美遺跡のような多数主体部の被葬者の一族の場合がそれに相当したと考えることは可能である。

メラネシアの交易のように、交易者が物資をため込まず、それらを副葬にまわさない事例もあるように、近畿地方もそうした様相であった可能性も考えうる。その観点からみると、エリート一族を形成した河内地域は、近畿地方の社会の一つの中核を担っており、方形周溝墓に穿孔土器を積極的に採用し、個々の儀礼におけるまとまりを形成するなど、あくまでこの視点からみた場合であるが、隆盛がみられた社会であるといえる。なお、弥生時代後期においては、後期前葉の巨摩廃寺下層遺跡の2号方形周溝墓²⁵⁾で、多数主体部が継続し、3次にわたって同一墳丘に、水平方向ではなく垂直方向の拡張というべき方法で埋葬を繰り返している。これは第Ⅳ様式の方向性をひきつつも、より系譜性を強調する方法であるといえよう。さらにこの遺構では、装身具と朱をもつ子供が中心主体となり、別の子供も切り合いをもたずに他の大人と同様に並ぶものもみられることから、子供の扱いから溝口孝司が主張している政治組織の変化(溝口2001、ほか)がここにみられる可能性もある。埋葬の反復は認められないが、多数主体部と子供の扱いについて同様相を示す可能性のあるものは、大阪府羽曳野市駒ヶ谷遺跡²⁶⁾、大阪市喜連東遺跡²⁷⁾があげられるが、詳細な内容のわかるものはまだ少なく、今後の事例の増加を待ちたい。

これまで、弥生社会では農業共同体の成長がその社会発展に大きく寄与すると考えられてきた(近藤1962、都出1989、広瀬2003、ほか)。そして、銅の入手などの遠い地域からの物資の取り扱いには首長を介する必要があると考えられてきた。しかし、九州地方は別として、弥生時代中期までの近畿地方は、首長と認められる個人の突出もみられず、クラン内分節の突出、いいかえれば、エリート一族の繁栄する時期である。大形建物がみられる和泉地域の池上曾根遺跡(秋山1999)においても、第Ⅳ様式には多数埋葬化することから、河内湖周辺と同様の様相であったのではないかと考えられる。九州地方における青銅器生産の一地域集約や、前漢鏡の入手およびその大量副葬は内外ともに特定個人の承認を必要としうる点に首長制の可能性を示唆するが、近畿地方においては、大和盆地における唐古・鍵遺跡の様相がその可能性になりうるかもしれないものの、現状では不明瞭である。

一方、翡翠などを例に考えられるように、縄文時代から長距離交易は認められる。交易は社会を支え

る一側面であり、余剰や農耕とは質のちがうものである²⁵⁾。その行為の成立に対して首長の存在は必要条件ではなく、首長が存在していれば、それに積極的に介入するという性質のものである。弥生時代の社会が水稻農耕を基盤とすることは間違いなく、それによってクラン内の分節が安定した状況であったことが想定されるが、それらのなかの優劣、つまりは階層性を支えていたのは、農耕だけではなく近畿地方にみられるような豊かな交流網とそれに支えられた交易活動ではないだろうか。近年、弥生時代中期の近畿地方の交易は、個々の集団が担い、首長を介するものではなかった可能性があることが若林邦彦によって示唆されているが（若林2001）、今回の検討でみられた河内地域の社会の様相はその可能性を支持するといえる。ただし、それは河内湖周辺の状況であり、北部九州においては首長制が成立しうるし、大和盆地においてもその可能性はすてきれない。その他、播磨地域などにおいてもその可能性はすてきれず、個々の政治組織はそれぞれの脈絡によって個別に存在する可能性も考慮されるべきだろう。

政治組織とその社会における豊かさなどは全く別の問題であり、地域の状況、その後の継続を検討していくのがこれからの問題であるように思う。マリノフスキーがかつて論じたクラ交易も政治組織の異なる集団間でおこなわれる。また、その中心であるトロブリアント諸島も政治的にはちがっているが文化的には同じ地域なのである（マリノフスキー1922）。弥生社会もそのような異なった政治組織の集まりと文化的同一性を示していてもおかしくはない。

6. おわりに

以上、近畿地方ほかの方形周溝墓とその諸属性の集成を基礎として検討を加え、今回の瓜生堂遺跡北東部域における弥生時代中期墓域の位置づけを含めていくつかの考察を試みた。その内容に関しては多岐にわたることもあり、あらためてここでは約言しない。しかし、所期の目的である近畿弥生墓制内における“普遍性”と“特殊性（個性）”の実態をめぐる現象整理については、多くの研究者に対して再認識への喚起をはたしたといえる。とともに、重要な成果になったと思料される。また、それらの基礎とした本稿での集成作業結果（表23～29）は、それだけを取りあげても、爾来この種の研究における貴重な基礎データとなると自負してよいであろう。今回はそれらに依拠してひとつの社会像を構築してみたことになる。当然ながら、同じ資料群を駆使して、また別なイメージの形成も十分可能なことは自明である。本稿の標題を、近畿弥生社会“復原への展望”とした所以である。今後、忌憚のないご意見等をいただければと念じている。

〔註〕

- 1) 大和地域については清水眞一氏による、より広い集成がなされている（清水2003）。
- 2) 埋蔵文化財研究会1982
- 3) 第二阪和国道内遺跡調査会1971
- 4) 兵庫県教育委員会1995
- 5) (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所1992
- 6) 岸本一宏2001
- 7) これについての詳細な検討は別稿を用意している。
- 8) 出自集団はリネージュやクランなどを総称する用語であり、本稿では出自は集団に帰属するものとして使用し、地域に帰属するものとしては使用しない。この出自という用語の混乱の問題については、田中良行1998に明快に示されている。
- 9) ただし、第Ⅴ様式にはⅠ型木棺が再び増加する地域も存在するため、主に第Ⅳ様式の状況である。

- 10) 小郡町教育委員会1970
- 11) 鹿島町歴史民俗資料館1999
- 12) 長崎県教育委員会1995
- 13) 小郡市教育委員会2003
- 14) 大庭重信が詳細に述べているように、方形周溝墓に供献される土器の大部分に煮沸の痕跡がみられる。甕以外の器種には内面にコゲがつくことはなく、液体を煮沸した可能性が高い（大庭1992）。この傾向は本報告の瓜生堂遺跡1999年度調査の方形周溝墓出土土器にもみられる。高杯・鉢などは火にかけられない場合も多い。
- 15) 大庭2001に方形周溝墓の拡張、供献土器の出土状況が極めて詳細に示されている。
- 16) 大阪市教育委員会の辻美紀氏に許可をえて、実見させていただいた。
- 17) 第Ⅳ様式に並行する高蔵式期に穿孔土器が少ない傾向があり、近畿地方の様相との差異がみられる。また、服部遺跡と朝日遺跡の第Ⅱ様式の穿孔は鉢になされている。河内地域や大和盆地では壺になされるものが多いことと対照的である。ただし、それ以後は朝日・服部両遺跡においても壺を中心とした器種に穿孔がなされるようになる。
- 18) 朝日遺跡では最初に鉢が穿孔され、次の時期からは河内地域などと同様に壺を中心に穿孔する。これは服部遺跡と共通する。
- 19) 家族、世帯を単に血縁関係だけのまとまりとして、方形周溝墓に適用している研究もあるかもしれないが、それは用語の問題として適当ではない。夫婦の単位が墓制に表れることについては、大田侑子の中国古代における検討がある。それによれば、西周代にもわずかに認められるものの、春秋中期からその動きが顕著となり、支配階級を中心として宗族（氏族）から国君と夫婦を中心とした嫡流の一族が独立するという、集権化の動きと極めて相関する論が述べられている。また、被支配層の夫婦合葬（同時の埋葬ではない）の出現は、支配階級にいち早くその動きがみられた秦国において、法律の改変によって、夫婦を中心とする小家族化が起こったためとしている（大田1991）。このような研究を参照した場合、夫婦、家族が墓制に表れることは、政治組織の進展と密接にかかわっているようであり、近畿地方の方形周溝墓に単純にこの用語を使用することはやはり問題がある。人骨の分析などでそれが確認された場合は、あらためて近畿地方の社会の特質として重要視されるべきではある。
- 20) これは溝内埋葬を含め、多人数を同一墳丘におさめる場合の方向性の問題にかかわる。すなわち、河内、摂津の地域では墳丘の中心にある人物と中心の周辺に葬られた親族が近い位置にありえたことに対して、単数主体で溝に人を葬る形態のものは、親族のつながりがあったとしても厳密に区分された関係を示すことになる。墓群と一墳丘の関係など方形周溝墓にみられる親族構造が未確定な現段階で、以上のような想定は問題があるが、多人数の埋葬とはいえ、墳丘上と溝内では都出比呂志が指摘しているように親族構造に差異がみられる可能性が強く（都出1989、ほか）、以前に都出がまとめあげたような墳丘、溝内埋葬を並列した大きな世帯墓としての方形周溝墓（都出1986）は、その質的部分で同列には扱えないものと考えられるだろう。
- 21) 例えば、河内地域の方形周溝墓に摂津地域の土器が入ることなどは、その周溝墓の被葬者、またはその配偶者が、河内・摂津地域（もしくはそれ以上の広さ）に広がるクランに属する人物であれば、その関係を通じて摂津地域の土器が供献される可能性は高くなる。鬼塚遺跡と雲井遺跡の穿孔土器が共通する理由も同様に求められる。以上のような想定は溝口孝司や田中良行が九州の事例や民族誌から、主に理論面から想定してきた社会と結果的に近いものとなった（溝口2000、同2001、田中1998、ほか）。もちろん、今後も様々な方向からこれを追証し、その正否、詳細を追い求めなければならない。
- 22) (財)大阪文化財センター・大阪府教育委員会1981
- 23) 羽曳野市教育委員会1992
- 24) 大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会2002
- 25) 交易について、広瀬和雄も同様の見解を示しているが、弥生時代の交易に首長を介在させる前提をとるようであり（広瀬2003）、その部分で本稿と差異がみられる。

〔引用・参考文献〕

- 秋山浩三 1999 「池上曾根遺跡中樞部における大形建物・井戸の変遷」『みずほ』28・31 大和弥生文化の会
2003 「弥生時代・畿内石廬丁の生産と流通」『道具の生産流通と地域関係の形成』古代学協会中国四国支部
瓜生堂遺跡調査会 1981 『瓜生堂遺跡Ⅲ』
小郡市教育委員会 2003 『横隈上内畑遺跡5』(小郡市文化財調査報告書172)
小郡町教育委員会 1970 『津古内畑遺跡』
大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会 2002 『平成12年度 大阪市埋蔵文化財包含地発掘調査報告』
(財)大阪文化財センター・大阪府教育委員会 1981 『巨摩・瓜生堂』
1983 『山賀(その3)』
1986 『城山(その1)』
大阪府教育委員会 1999 『池上曾根遺跡』
大場磐雄 1965 「方形周溝墓」『日本の考古学Ⅲ 弥生時代』月報 河出書房
大庭重信 1992 「弥生時代の葬送儀礼と土器」『待兼山論叢』26 大阪大学文学部
1999 「方形周溝墓制からみた畿内弥生時代中期の階層構造」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室
2001 「加美遺跡方形周溝墓の葬送過程の復元」『大阪市文化財協会研究紀要』4 (財)大阪市文化財協会
大村 直 1991 「方形周溝墓における未成人中心埋葬について—家族墓・家長墓説批判—」『史観』23 早稲田大学史学科
大田侑子 1991 「中国古代における夫婦合葬—その発生と展開および家族制度との関わり—」『中国の歴史と民族』第一書房
鹿島町歴史民俗資料館 1999 『開拓者たちの眠るところ』
勝部明生 1976 「穿孔土器の考察—船橋遺跡出土例を中心として—」『横田健一先生還暦記念 日本史論叢』横田健一先生
還暦記念会
加藤安信 1982 「第3節 弥生土器の検討 (3) - B 穿孔土器」『朝日遺跡Ⅰ』愛知県教育委員会
岸本一宏 1987 「畿内弥生社会構造に関する一考察」『文化史論叢 上』横田健一先生古稀記念会
1988 「近畿地方の弥生時代墳丘墓について—集落構造把握への視点として—」『網干善教先生華甲記念 考古学
論集』網干善教先生華甲記念考古学論集刊行会
2001 「兵庫県下の弥生時代「円周墓」集成」『ひょうご考古』7 兵庫考古研究会
近藤義郎 1962 「弥生文化論」『岩波講座日本歴史 1 原始および古代1』岩波書店
酒井龍一 1974 「石廬丁の生産と消費をめぐる二つのモデル」『考古学研究』21-2 考古学研究会
1985 「弥生時代」『図説 発掘が語る日本史 4 近畿編』新人物往来社
佐原 真 1970 「大和川と淀川」『古代の日本 5 近畿』角川書店
澤田大多朗 1980 「方形周溝墓の展開」『東アジア世界における日本古代史講座 1 原始日本文明の系譜』学生社
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992 『瀬名遺跡Ⅰ』
清水眞一 2003 「大和の弥生時代方形周溝墓と台状墓」『橿原考古学研究所論集』14 八木書店
鈴木敏行 1975 「畿内地方における方形周溝墓の展開」『原始古代社会研究』2 校倉書房
清家 章 2002 「近畿古墳時代の埋葬原理」『考古学研究』49-1 考古学研究会
第二阪和国道内遺跡調査会 1971 「昭和四六年度第二阪和国道内遺跡発掘調査報告4」
田代克己 1987 「方形周溝墓」『弥生文化の研究 8』雄山閣
田中良行 1991 「弥生時代の親族構造」『新版日本の古代 3 九州・沖縄』角川書店
1998 「出自表示論批判」『日本考古学』5 日本考古学協会
田中良行・土井直美 1988 「二列埋葬墓の婚後居住規定」『日本民族・文化の生成』六興出版
田中清美 1986 「加美遺跡発掘調査の成果」『古代を考える』43 古代を考える会
1988 「弥生時代前・中期における穿孔・打ち欠きのみられる土器について」『考古学論集Ⅱ』考古学を学ぶ会
1994 「河内地域における弥生時代の本棺の型式と階層」『文化財学論集』文化財学論集刊行会
田辺昭三 1958 「Ⅲ 小竪穴群と溝状遺構」『大津市南滋賀遺跡調査概報』大津市教育委員会
都出比呂志 1970 「農業共同体と首長権」『講座日本史 1 古代国家』東京大学出版会
1979 「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』26-3 考古学研究会

1986 「墳墓」『岩波講座日本考古学 4 集落と祭祀』 岩波書店

1989 『農耕社会の成立過程』 岩波書店

寺澤 薫 2000 『王権誕生』（日本の歴史02） 講談社

中川和哉・小池 寛 2003 「方形周溝墓の景観と改修－八木町池上遺跡の調査から－」『日本考古学協会第69回総会研究発表要旨』 日本考古学協会

長崎県教育委員会 1995 「宇久松原遺跡」（県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅲ）

蜂屋晴美 1983 「終末期石器の性格とその社会」『古文化論叢』 藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会

羽曳野市教育委員会 1992 「羽曳野市駒ヶ谷地区埋蔵文化財調査報告書」

春成秀爾 1985 「弥生時代畿内の親族構成」『国立歴史民俗博物館研究報告』 5 国立歴史民俗博物館

東大阪市教育委員会 1997 「瓜生堂遺跡第42次調査概報」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要—1995年度調査—』

2002 『瓜生堂遺跡46、47－1・2次発掘調査報告書』

（財）東大阪市文化財協会 1997 『鬼塚遺跡第8次発掘調査報告書』

（財）東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会 1987 『鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告』

2002 「神並・西ノ辻・鬼虎川・水走遺跡調査報告書－国道308号関連調査の成果」

兵庫県教育委員会 1991 『雲井遺跡第1次発掘調査報告書』

1995 『東武庫遺跡』

広瀬和雄 2003 『前方後円墳国家』（角川選書355） 角川書店

福永伸哉 1985 「弥生時代の本棺墓と社会」『考古学研究』 32－1 考古学研究会

1991 「本棺墓と人の交流」『原始・古代日本の墓制』 同成社

2001 「邪馬台国から大和政権へ」 大阪大学出版

藤井 整 2001 「名神大山崎ジャンクション関係遺跡」『京都府遺跡調査概報』 101 （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

藤沢真依 1987 「近畿地方の方形周溝墓」『横田健一先生古稀記念文化史論集』 横田健一先生古稀記念会

埋蔵文化財研究会 1982 「西日本における方形周溝墓をめぐる諸問題」（第11回埋蔵文化財研究会）

マリノフスキー 1922 「西太平洋の遠洋航海者」 中央公論社（寺田和夫・増田義郎訳1967年）

溝口孝司 2000 「墓地と埋葬行為の変遷－古墳時代の開始の社会的背景理解のために－」『古墳時代像を見なおす』 青木書店

2001 「弥生時代の社会」『村落と社会の考古学』（現代の考古学6） 朝倉書房

若林邦彦 2001 「弥生社会複雑化の実像」『銅鐸から描く弥生社会』 一宮市博物館

【図・表・写真出典】

図409：大阪府教育委員会1999、図410：中川・小池2003、図411：福永1985から一部改変作成、図412：瓜生堂遺跡調査会1981、（財）東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会1987、（財）大阪文化財センター・大阪府教育委員会1983から作成、図413：新規中村作成、図414：瓜生堂遺跡調査会1981、図415：（財）大阪文化財センター・大阪府教育委員会1986、図416：東大阪市教育委員会2002、図417：東大阪市教育委員会1997から作成、図418：（財）東大阪市文化財協会1997、兵庫県教育委員会1991から作成、図419：（財）東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会2002、表23～29：新規中村作成、写真10：瓜生堂遺跡調査会1981、（一部改変を含む）

【謝辞・付記】

本編は、第10回瓜生堂（近鉄）勉強会（2003年6月26日）の発表内容に基礎をおいている。当日の検討において、多くの方からご教示をいただいた。また、写真原版借用等において、中西克宏、東大阪市教育委員会、東大阪市立郷土博物館の各氏・機関のご援助をたまわった。末筆ながら、あわせて深謝申しあげたい。なお、本稿作成は、両名の協議のもと、1・6を秋山、2～5を中村が分担執筆し、全体的な調整や除加筆等は秋山がおこなった。（秋山記）／本論は大阪大学大学院に提出した2001年度の修士論文、2003年度の博士予備論文の一部である。都出比呂志、福永伸哉、高橋照彦諸先生方には日々、ご指導していただきました。また、田中清美氏には加美遺跡の資料を実見させていただいただけでなく、遺跡の様相などもご教示していただきました。大庭重信氏は資料見学をさせていただいたのみならず、方形周溝墓についての貴重なご教示をいただきました。そして、清水眞一氏には大和の方形周溝墓事例のご教示をいただきました。皆様のご好意に感謝します。（中村記）

表23 河内地域の方形周溝墓

大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター1980『瓜生堂』											
周溝墓	主体部	主体部タイプ	供献土器	穿孔	時期	墳丘規模(m)		棺規模(cm)		棺型式	
A地区	1号	不明	不明	甕1	IV	19.5	11以上				
	2号	土壌墓1	空間分有型	不明	IV	16	11				
	3号	不明	不明	不明	IV						
B地区	4号	木棺墓1	空間分有型	不明	IV	12	7.5以上	168	40	II型?	
	5号	土器棺墓	不明	不明		10	8				
	6号	土壌墓1	空間占有型	不明		7	7				
C地区	7号	土壌墓2 土壌墓3 土壌墓4 土壌墓5 土壌墓6	空間占有型	台付鉢、甕が供献土器。碧玉管玉1点盛土より 広口壺、甕、鉢など。供献かは不明	なし 不明	IV IV	15	15			
	8号	土壌墓1 土壌墓2 土壌墓3 土壌墓4 土壌墓5 土壌墓6 土壌墓7	空間占有型	広口壺、高杯、甕、鉢など。供献かは不明	不明	IV	15	9			
	9号	不明	不明	不明	IV	12.5	8.5				
	10号	土壌墓1 土壌墓2	不明	不明	IV						
	11号	不明	空間分有型?	不明	IV	12以下	12以下			II型?	
	12号	木棺墓1 土壌墓1 土壌墓2 土壌墓3 土壌墓4	不明	不明	IV	12以下	12以下				
	13号	土壌墓1 土壌墓2 土器棺墓1	不明	不明	IV	13以上					
	14号	木棺墓1 土壌墓1 土壌墓2		不明	IV	15					
	15号	木棺墓1	単数型?	不明	IV	6.2	6.2以上			II型?	
	16号	土壌墓	単数型	不明	IV	4.5	3.5				
D地区	17号	不明		不明	IV	6	6以上				
	18号	不明		不明	IV						
	19号	土壌墓1 土壌墓2 土壌墓3 土壌墓4 土壌墓5		不明	IV						
	20号	土壌墓1 土壌墓2		不明	IV	12	6.5				
↑ A～D地区の20号方形周溝墓まではⅢ～Ⅳ様式の大溝以北、20号が大溝に接する ↓ 21号より大溝以南											
E地区	21号	土壌墓1 木棺墓1 土壌墓2 土壌墓3 土壌墓4 土壌墓5 土壌墓6 土壌墓7 土壌墓8 土壌墓9 土壌墓10 土壌墓11 土壌墓12 土壌墓13 土壌墓14	空間分有型 墳丘拡張	広口壺、鉢 広口壺、細頸壺、高杯、甕、鉢、水差	なし	IV	13	10			不明
	22号	不明		不明	IV						
	23号	木棺墓1	不明	不明	IV						
	24号	土器棺墓	単数型	不明	IV	2.5	2.5	116	34	丸太棺	
	25号	不明		不明	III	12以上	12				
F地区は空白地、H地区は井戸など、G地区は居住域。H地区からは二重周溝の高床式建物、1建の竪穴住居、10棟以上の掘立柱建物、30基以上の土坑。											
大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター1981『巨摩・瓜生堂』											
周溝墓	主体部	主体部タイプ	供献土器	穿孔	時期	墳丘規模(m)		棺規模(cm)		棺型式	
H地区	1号	不明									
	2号	木棺墓1	空間占有型?	不明	IV	9	9	128 126 64	34	II型	
	3号	木棺墓2 木棺墓3 土器棺墓1								II型	
I地区	4号	土器棺墓1	不明	不明	IV						
	5号	不明		不明	IV	10	7	156	30	II型	
	6号	木棺墓1	単数型	不明	IV	8	5以上				
J地区	7号	土器棺墓1	不明	不明	IV	7	7以上				
	8号	土器棺墓2	単数型?	不明	IV	7	7以上				
	9号	不明	単数型	不明	IV	10	9	96	29	II型	

巨摩庵寺下層遺跡の後期周溝墓へとつづく。

瓜生堂遺跡調査1981『瓜生堂遺跡Ⅲ』—本表末尾に補足データあり

	周溝墓	主体部	主体部タイプ	供献土器	穿孔	時期	墳丘規模(m)		棺規模(cm)		棺型式
小阪ポンプ場	2号	木棺墓1	空間占有型	壺、無頭壺、高杯、甕、水差	広口壺1	Ⅳ	14.8	9.7	150	40	Ⅱ型
		木棺墓2							125	34	Ⅱ型
		木棺墓3							140	50	Ⅱ型
		木棺墓4							150	42	Ⅱ型
		木棺墓5							170	38	I B型
		木棺墓6							140	40	Ⅱ型
		土壊墓1									
		土壊墓2									
		土壊墓3									
		土壊墓4									
		土壊墓5									
		土壊墓6									
		土器棺1									
		土器棺2									
		土器棺3									
		土器棺4									
		土器棺5									
		土器棺6									
	8号	木棺墓1	不明 単数型	広口壺(頸部突帯)	広口壺1	Ⅳ	12.7	6.5	160	50	I B型
	9号	木棺墓1									
	12号	不明	空間占有型	甕	なし		5.5	4	140	48	
	10号	木棺墓1									
	13号	土壊墓1	空間占有型	細頸壺、無頭壺、鉢など	細頸壺1				142	50	
		土壊墓2							106	40	
		木棺墓1									
	14号	土壊墓2	空間占有型	広口壺、無頭壺、鉢、甕	無頭壺1	Ⅳ	16	10.8	156	55	Ⅱ型
		木棺墓1							158	51	Ⅱ型
		木棺墓2							133	40	Ⅱ型
		木棺墓3							135	30	Ⅱ型
		土器棺1									
	15号	木棺墓1	空間占有型	甕、広口壺、鉢など	胴部下半部	Ⅳ	8.5以上	9.5	124	42	Ⅱ型
		木棺墓2							160	42	Ⅱ型
		木棺墓3							168	50	Ⅱ型
		木棺墓4									Ⅱ型?
		土壊墓1									

財団法人大阪府文化財センター2004『瓜生堂遺跡Ⅰ』(本報告書)—詳細は本報告参照

	周溝墓	主体部	主体部タイプ	供献土器	穿孔	時期	墳丘規模(m)		棺規模(cm)		棺型式
99-1区	(S01184 ほか)			広口壺、高杯	広口壺1 高杯1	Ⅳ-2~3					
99-3区	S03200			広口長頸壺、甕、蓋付短頸壺、高杯杯部	短頸壺	Ⅲ-2~					
	S03270			把手台付鉢	なし	Ⅳ					
	S03280			水差	水差1	Ⅳ					
01-3区	S23200			甕、鉢、高杯片	不明	Ⅳ-2					
99-5区	S05200			鉢、広口壺4、広口長頸壺3、壺、壺体部3、 細頸壺、高杯2、把手台付鉢、甕3	広口壺2 壺1 広口長頸壺2 高杯1 把手台付鉢 甕1	Ⅲ~Ⅳ					
	S05220			広口壺1、壺体部1、水差1、高杯1	広口壺1 壺体部1	Ⅲ~Ⅳ					
	S05240			広口長頸壺1、鉢、広口壺、甕1、細頸壺上部	水差1 広口長頸壺1 鉢1 甕1	Ⅲ~Ⅳ					

東大阪市教育委員会1997『瓜生堂遺跡第42次調査概報』『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要—1995年度調査(1)—』

	周溝墓	主体部	主体部タイプ	供献土器	穿孔	時期	墳丘規模(m)		棺規模(cm)		棺型式
1号墓	木棺墓1 木棺墓2 木棺墓3 木棺墓4 土器棺1 土器棺2	空間占有型		脚付甕、甕4以上、高杯4、広口壺3 * 底部を確実に穿孔した例が存在 * 甕、壺の各一点に胴部中位穿孔がみられる	広口壺3 甕1 台付甕 高杯(底部)2	Ⅳ	8	7.5			Ⅱ型 Ⅱ型 Ⅱ型 Ⅱ型
2号墓	木棺墓1 土器棺1										
3号墓		不明		1号・2号間に、短頸壺、広口壺2、甕 * 確実に底部を穿孔例が存在、甕は不確定 水差、壺、台付鉢、広口壺3、甕1 * 底部穿孔は敲打によるが、確定かは不明。	短頸壺(底部)1 甕(底部)1 広口壺1 広口壺(底部)1 広口壺1	Ⅳ	7	6以上			
5号墓											
6号墓	木棺墓1 木棺墓2 木棺墓3 土壊墓1 土壊墓2	不明		水差3、直口壺1、広口壺2、高杯、甕2、 * 底部穿孔は確実にあるが、広口壺は不確定	直口壺1 甕1 広口壺1 高杯(底部)1 甕(底部)1 水差(底部)1 広口壺(底部)1	Ⅳ	6	4以上			Ⅱ型 Ⅱ型 Ⅱ型
8号墓	木棺墓1										
9号	土壊墓1	不明		8号・9号間に、甕2、広口壺、台付鉢 * 甕の底部穿孔は確定ではない。	甕1 甕(底部)1	Ⅳ	6.5	5.5	130	36	I 型?
10号	木棺墓1 木棺墓2								150 160	40 50	Ⅱ型 Ⅱ型

東大阪市教育委員会2002『瓜生堂遺跡第46、47-1・2次』

	周溝墓	主体部	主体部タイプ	供献土器	穿孔	時期	墳丘規模(m)		棺規模(cm)		棺型式
D地区	1号	木棺墓1	空間分有型?	水差2、甕3、広口壺1(全て墳丘上)	水差2	IV	11.8	7.8	150	51	Ⅱ型
		木棺墓2							164	42	Ⅱ型
		木棺墓3							140	40	Ⅱ型
	3号	土器棺1	空間占有型	小型甕	なし	Ⅲ	10.4	6.4			
		木棺墓1							134	50	Ⅱ型
		木棺墓2							130	25	Ⅱ型
	4号	木棺墓3	空間分有型	鉢、壺、広口壺など	なし	Ⅲ	10.9	8	139	44	Ⅱ型
		木棺墓4							100	26	Ⅱ型
		木棺墓1							80	16	Ⅱ型
		木棺墓2									
		木棺墓3							152	51	Ⅱ型
C地区	5号	木棺墓4	不明	鉢、広口壺、高杯、水差	なし	IV					
		土器棺1									

巨摩遺跡：大阪府文化財センター1995『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告』

	周溝墓	主体部	主体部タイプ	供献土器	穿孔	時期	墳丘規模(m)		棺規模(cm)		棺型式
I地区 4面	9号墓	木棺墓1	空間占有型	広口壺口縁、広口壺2(口縁打欠?)、水差		IV	13	8以上	63	24	Ⅱ型
		木棺墓2									Ⅱ型
		木棺墓3							60	27	Ⅱ型
		木棺墓4							62	14	Ⅱ型
		木棺墓5							165	38	Ⅱ型
		木棺墓6									
		土器棺1									
		土器棺2									
		木棺墓1							150	50	Ⅱ型
	11号墓	木棺墓2	不明	広口壺2、直口壺、甕2以上(V様式) 甕6、広口壺8以上、高杯3、水差2、 無頭壺(蓋付)、鉢(IV様式)	広口壺(V) 甕2 高杯1 無頭壺1 広口壺4 水差1	IVから Vへ継 続	12以上	12	170	37	Ⅱ型
		木棺墓3							175	45	Ⅱ型
		木棺墓4							120	37	Ⅱ型
		木棺墓5							150	46	Ⅱ型
		木棺墓6							165	45	Ⅱ型
		木棺墓7							128	37	Ⅱ型
		木棺墓8									
		木棺墓9									
		土器棺1									
		土器棺2									

財団法人東大阪市文化財協会・1986『久宝寺遺跡発掘調査報告』

	周溝墓	主体部	主体部タイプ	供献土器	穿孔	時期	墳丘規模(m)		棺規模(cm)		棺型式
	1号	木棺墓1	空間占有型	広口壺、台付甕など	なし	IV	16	10	160	40	Ⅱ型
		木棺墓2							146	30	Ⅱ型
		木棺墓3									Ⅱ型?
		土器棺1									
		土器棺2									

大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター1986『城山(その1)』

大塚町教育委員会 所蔵品入札販売 所蔵品「1850」販売について														
	周溝墓	主体部	主体部タイプ	供献土器	穿孔	時期	墳丘規模(m)		棺規模(cm)		棺型式			
	24号	不明	空間占有型	広口壺	広口壺	Ⅳ	13	9						
	27号	不明												
	22号	不明												
	31号	不明												
	32号	不明												
	21号	不明												
	23号	木棺墓1		高杯 広口壺30以上、高杯7、甕6、細頭壺、鉢など	広口壺7 高杯3 鉢1	Ⅴ Ⅳ	12 14.5	9 11	160	44	Ⅱ型			
		木棺墓2							158	50	Ⅱ型			
		木棺墓3							162	50	Ⅱ型			
		木棺墓4							180	40	Ⅱ型			
		木棺墓5							173	54	Ⅱ型			
		土器棺1												
		土器棺2												
		土器棺3												
		土器棺4												
		土器棺5												
		土器棺6												
		土器棺7												
	20号	不明	空間分有型		広口壺2 甕1	Ⅳ	13	11	170	40	Ⅱ型			
	28号	不明									Ⅱ型			
	35号	不明												
	19号	木棺墓1	広口壺、高杯、甕、鉢など											
		木棺墓2												
		土器棺1												
		土器棺2												
		土器棺3												
		土器棺4												
		土器棺5												
		土器棺6												
	18号	不明												
	32号	不明												
	29号	土器棺1	不明		不明		10	10						
		土器棺2												
		木棺墓1	広口壺20以上、高杯3以上、甕10以上、細頭壺、 鉢など合わせて土器50点以上											
		木棺墓2												
		木棺墓3												
		木棺墓4												
		木棺墓5												
		土器棺1							160	50	Ⅱ型			
		土器棺2							192	46	Ⅱ型			
		土器棺3							166	52	Ⅱ型			
		土器棺4							156	40	Ⅱ型			
		土器棺5												

財団法人東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会1987『鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告』
財団法人東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会1988『鬼虎川遺跡第19次発掘調査報告』
財団法人東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会1988『鬼虎川遺跡第29・30次発掘調査報告』
大阪府教育委員会・東大阪市教育委員会2002『鬼虎川遺跡第22次発掘調査報告』・財団法人東大阪市文化財協会1990『鬼虎川遺跡第31次発掘調査報告』
財団法人東大阪市文化財協会1994『西ノ辻遺跡第27次・鬼虎川遺跡第32次発掘調査報告』・財団法人東大阪市文化財協会1994『鬼虎川遺跡第33次発掘調査報告』

* 墓の番号は東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会2002『神並・西ノ辻・鬼虎川・水走遺跡調査報告書―国道308号関連調査の成果に―』に従う

* A地区には他に1号木棺(15~20才の男性)があり、内法160×45程度。1号土壇は小児埋葬。C2地区には2号木棺(小児?、I型)があり、内法51×21程度。

東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会1988「西ノ辻・鬼虎川遺跡」

財団法人東大阪市文化財協会1990「西ノ辻遺跡第26次発掘調査概報」『財』東大阪市文化財協会外報集1989年度』

521

4号	土器棺	不明	広口壺、鉢、甕、高杯	広口壺1 広口壺3 甕1 高杯1	Ⅲ～Ⅳ					
5号										
6号	不明	不明	甕、広口壺、水差など	広口壺1 甕2 水差1	Ⅲ～Ⅳ					
7号	不明	不明								
8号	不明	不明								
9号	木棺墓1	不明・溝内								

財団法人東大阪市文化財協会1997『鬼塚遺跡第8次発掘調査報告書』

周溝墓	主体部	主体部タイプ	供献土器	穿孔	時期	墳丘規模(m)	棺規模(cm)	棺型式
1号墓 2号墓 3号墓	木棺墓1	不明	壺蓋、甕2、細頸壺1、長頸壺1(他地域)、 広口壺3(摂津の土器。また、 穿孔が大きく摂津の雲井に類似)	甕1 細頸壺1 広口壺3	Ⅲ		172 65	I型

大阪府教育委員会2002『招提中町遺跡』

周溝墓	主体部	主体部タイプ	供献土器	穿孔	時期	墳丘規模(m)	棺規模(cm)	棺型式
11号	不明		高杯片、土器下半部、供献かは不明			9 7.5		
12号	不明				Ⅱ～Ⅲ	5.5 5.5		
13号	不明		壺など。供献かは不明		Ⅱ～Ⅲ	6 5		
14号	不明		南東周溝にベンガラが埋納。広口壺片		Ⅱ～Ⅲ	8 7.5		
2号	不明		広口壺片、供献かは不明		Ⅱ～Ⅲ	6 5		
3号	不明		広口壺片、供献かは不明		Ⅱ～Ⅲ	11 8		
4号	不明				Ⅱ～Ⅲ	7 6		
5号	不明		広口壺片、供献かは不明		Ⅱ～Ⅲ	5.5 5.5		
7号	不明				Ⅱ～Ⅲ	4 3.5		
29号	不明				Ⅱ～Ⅲ	6.5 5		
15号	不明		広口壺片、供献かは不明		Ⅱ～Ⅲ	6 6		
16号	不明		広口壺片、供献かは不明		Ⅱ～Ⅲ	10 8		
17号	不明		広口壺片、供献かは不明		Ⅱ～Ⅲ	7 6.5		
6号	不明				Ⅱ～Ⅲ	8 7		
8号	不明				Ⅱ～Ⅲ	5.5 4.5		
9号	不明		広口壺片、供献かは不明		Ⅱ～Ⅲ	6.5 6		
10号	不明				Ⅱ～Ⅲ	7 6		
21号	不明				Ⅱ～Ⅲ	4.5 3以上		
27号	不明				Ⅱ～Ⅲ	9.5 8		
22号	不明		広口壺、壺蓋		Ⅱ～Ⅲ	9 7		
23号	不明		広口壺、土器片		Ⅱ～Ⅲ	7 6		
24号	不明		広口壺		Ⅱ～Ⅲ	6.5 5		
25号	不明				Ⅱ～Ⅲ	5 5		
26号	不明		広口壺		Ⅱ	13 12.5		
28号	不明		広口壺片、鉢片、供献かは不明		Ⅱ	7.5 6		
18号	不明		長頸壺3、壺口縁1		Ⅱ	15.5 11		
19号	不明		広口壺片、供献かは不明		Ⅱ～Ⅲ	7 5		
20号	不明		広口壺など					
30号	不明							

財団法人大阪文化財センター・大阪府教育委員会1983『山賀』

周溝墓	主体部	主体部タイプ	供献土器	穿孔	時期	墳丘規模(m)	棺規模(cm)	棺型式
1号		単数型	広口長頸壺	不明	Ⅱ	7.6 7.2	135 45	I型
2号		単数型	鉢		Ⅱ	6 5	70 30	I型
3号		単数型	広口壺、高杯		Ⅱ	5.5 4.7	100 50	I型
4号	木棺1	単数型	広口長頸壺が盛土内に横倒しで安置		Ⅱ	4 4	38	I型?
5号	木棺1	単数型	壺片		Ⅱ	4 4	100 45	Ⅱ型?
6号	木棺1	単数型			Ⅱ	5 5	86 38	I型
10号		単数型			Ⅱ	6 5	134 33	Ⅱ型
7号木棺	非周溝墓				Ⅱ			
8号木棺	非周溝墓				Ⅱ		46 26	Ⅱ型
9号木棺	非周溝墓				Ⅱ		135 45	I型?
11号木棺	非周溝墓				Ⅲ～Ⅳ		51 19	I B型

財団法人大阪文化財センター2003『大尾遺跡』

周溝墓	主体部	主体部タイプ	供献土器	穿孔	時期	墳丘規模(m)	棺規模(cm)	棺型式
1区	1号		細頸壺、広口壺など。供献かは不明		Ⅲ	9.5 5		I型
2区	2号	木棺墓1				8.5 8		
	3号		大型壺					
	4号							
2・3区	5号					12 9		Ⅱ型?
	6号	土壊墓	単数型			16 14		
	7号		墳丘拡張型					
	11号		壺片など		Ⅳ			
3区	8号							Ⅱ型?
	9号		壺片など		Ⅳ	12 9.5		
	10号	木棺墓1?	不明			12 9.5		
	12号	土壊墓1 土壊墓2 土壊墓3	中心分有?			14 16		
4区	13号							
	14号							
	15号							
	17号		広口壺片		Ⅲ	15 10		

2・4区 4・5区 5区	18号	木棺墓1 (墳丘端)	不明	広口壺片	Ⅲ Ⅲ～Ⅳ	12.5	9.5			I型?
	20号					12.5	9			
	19号					14.5	14.5			
	16号			広口壺片		9	8			I型
	21号	木棺1(墳 丘北側)	不明	*5区全体に広口壺、壺片などがみられる		10.5	8			
	22号					10.5	9	180	39	Ⅱ型
	23号	木棺墓1 木棺墓2 木棺墓3 土墳墓1 (墳丘端)	空間分有型	床に水銀朱				159	45	I型
	24号	木棺墓1 (墳丘端)	不明	棺内から打製石槍				180	55	Ⅱ型
		木棺墓1 (墳丘端)						155	40	Ⅱ型
	25号	土墳1 土墳2	不明			9.5				
	26号					5	5			
	27号	木棺墓1 木棺墓2 土墳墓 土墳墓 (溝内) 土墳墓 (溝内)	空間占有型			6.5	6.5	160	45	Ⅱ型
								210	50	Ⅱ型
	28号	土墳墓1 (墳丘端)	不明			10	8.5			
		木棺墓1 (溝内)						183	45	Ⅱ型
	29号					8				
	30号					9				
	31号	土墳墓1 土墳墓2 土墳墓3 木棺墓1 土墳墓4	空間分有型			7	6			
								160	33	Ⅱ型
	32号					10				
	33号	木棺墓1 木棺墓2 木棺墓3 土墳墓1 木棺墓4	空間占有型	床に水銀朱		14.5	11	160	30	Ⅱ型
								150	40	I型
								170	45	Ⅱ型
	34号							210	45	Ⅱ型
	35号					13.5	11.5			
	36号									
	37号									

四條市教育委員会1987『雁屋遺跡』

周溝墓	主体部	主体部タイプ	供献土器	穿孔	時期	墳丘規模(m)	棺規模(cm)	棺型式
1号	木棺墓1 木棺墓2 木棺墓3 木棺墓4 木棺墓5 木棺墓6 木棺墓7	空間占有型	壺、高杯、甕など。 報告には全体として穿孔・打ち欠き土器が多い と記載		Ⅲ～Ⅳ	12以上	13	150 42 180 60 180 45 175 60 150 42 115 30 115 35 Ⅱ型 Ⅱ型 Ⅱ型
2号	木棺墓1 木棺墓2 木棺墓3 木棺墓4 木棺墓5 木棺墓6 木棺墓7 木棺墓8 木棺墓9 木棺墓10 木棺墓11 木棺墓12 木棺墓13 (溝内)	空間占有型	壺、高杯、把手付鉢など(朱塗り)。 報告には全体として穿孔・打ち欠き土器が多い と記載		Ⅲ～Ⅳ	12以上	13	150 38 135 38 150 45 90 30 165 42 187 50 150 40 100 27 90 25 127 44 72 15 165 30 88 27 Ⅱ型 Ⅱ型 Ⅱ型
3号	木棺墓1 土器棺	不明	広口壺、甕、蓋、高杯		Ⅱ～Ⅲ	18.5	8.5	Ⅱ型
4号		不明				13		

大阪府教育委員会1987『雁屋遺跡発掘調査概要』

周溝墓	主体部	主体部タイプ	供献土器	穿孔	時期	墳丘規模(m)	棺規模(cm)	棺型式
1号	木棺墓1 木棺墓2 木棺墓3 木棺墓4 木棺墓5 木棺墓6 木棺墓7 木棺墓8	空間占有型	北東: 広口壺2、甕1 西: 広口壺5、甕8、高杯2、台付鉢2、細頸壺、 水差	広口壺3 甕2 細頸壺1 台付鉢1 水差1	Ⅳ	11	8.5	Ⅱ型? Ⅱ型? Ⅱ型? Ⅱ型? Ⅱ型? Ⅱ型? Ⅱ型?

2号	木棺墓9 木棺墓10 木棺墓11 木棺墓1 木棺墓2 木棺墓3 木棺墓4 木棺墓5	空間占有型	広口壺、細頸壺	不明	IV	10.5	7.5			II型? II型? II型? II型? II型? II型? II型? II型?
3号	木棺墓6 木棺墓1 木棺墓2 木棺墓3 木棺墓4	空間占有型			IV	10	10			II型? II型? II型? II型? II型?

財団法人大阪文化財センター1982『亀井遺跡』

	周溝墓	主体部	主体部タイプ	供献土器	穿孔	時期	墳丘規模(m)		棺規模(cm)		棺型式
長吉ポンプ場	SX1・2	1号	空間占有型	甕、高杯、壺など欠損が激しい	不明	Ⅳ	9m以上	6m以上	195	41	Ⅱ型
		2号							195	35	Ⅱ型
		3号							200	50	丸太棺？
		4号							192	52	Ⅱ型
		5号									不明
		6号							169	41	Ⅱ型
		7号									不明

財団法人大阪文化財センター・大阪府教育委員会1986『亀井その2』

	周溝墓	主体部	主体部タイプ	供献土器	穿孔	時期	墳丘規模(m)		棺規模(cm)		棺型式
1区	ST0101	木棺墓1 木棺墓2 木棺墓3 木棺墓4 木棺墓5 土器棺1 土器棺2	不明	無頸壺、蓋、水差、台付水差(一部墳丘上)	水差1 台付水差1	Ⅳ	16	18	190 160	45 40 40 38 20	Ⅱ型 Ⅱ型 Ⅱ型 Ⅱ型 Ⅱ型
3区	ST0301	木棺墓1	単数型	土器片、供献かは不明		Ⅲ?	10	9.5	125	62	Ⅰ型?
11区	ST1101	木棺墓1 木棺墓2 土器棺1	不明	水差、広口壺、高杯3以上	不明	Ⅳ			160	60 60	Ⅱ型
12区	ST1201 ST1202 ST1203	木棺墓1	不明 不明 不明			Ⅱ初 Ⅱ初 Ⅱ初				60	Ⅱ型?
17区	ST1701	木棺墓1 木棺墓2 木棺墓3 木棺墓4	空間占有型	広口壺2、甕2、壺・甕の体部(全て墳丘上) 甕の一つからイノシシの骨		Ⅲ	9.7	9.4	200 140 160	60 40 50 40	Ⅱ型 Ⅱ型 Ⅱ型 Ⅱ型
18区	ST1801			広口長頸壺、広口壺、高杯、甕、鉢 などを含め土器は数十個体	広口長頸壺1 広口壺1 甕1	Ⅲ	8	8			

財団法人大阪市文化財協会1999『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅷ』

周溝墓	主体部	主体部タイプ	供献土器	穿孔	時期	墳丘規模(m)	棺規模(cm)	棺型式
長原東 南地区	SX801 SX802		甕、高杯、水差、広口壺4 広口壺、土器片	広口壺1	IV IV	18 10以上 10以上 4以上		

大阪府教育委員会1998『山之内遺跡発掘調査報告』

周溝墓	主体部	主体部タイプ	供献土器	穿孔	時期	墳丘規模(m)	棺規模(cm)	棺型式
1区	1号墓 2号墓 3号墓 4号墓 5号墓 6号墓 7号墓 8号墓 9号墓 10号墓 11号墓 12号墓 13号墓 14号墓 15号墓 16号墓 17号墓	木棺墓1 土器棺(溝内)	単数型	広口壺2、広口長頸壺、広口短頸壺、甕 広口壺、他破片資料 台付鉢 広口壺2、細頸壺、甕2、鉢 壺口縁 広口壺、長頸壺、甕片 長頸壺3他 壺片 長頸壺	広口短頸壺 III III IV III~IV IV III II~III II II	7.7 7.5 11.9 8.9 10.7 9.2 11 8.5 5.6 3.5 5.5 4.4 8 7.2 7.5 5.7 6.4 4.3 5 5		II型?

大阪府教育委員会1998『桑津遺跡発掘調査報告』

周溝墓	主体部	主体部タイプ	供献土器	穿孔	時期	墳丘規模(m)	棺規模(cm)	棺型式
KW82-7 KW83-8	1号墓 2号墓 3号墓 1号墓 2号墓 3号墓 4号墓 5号墓		長頸壺 甕、広口壺片 長頸壺、広口壺片 甕片 壺片		III III II末 II II II II	5.5 5.5 6.7 5.2 7 5 5.5		

6号墓										
7号墓										
8号墓										
9号墓										
10号墓										
11号墓										
KW88-6	1号墓		広口壺2、広口長頸壺、短頸壺、高杯		Ⅲ	10	5			
	2号墓									
KW90-2	3号墓		広口壺2、頸壺、高杯、鉢		Ⅲ	14	11			
	1号墓		壺片、甕片		Ⅲ					
KW91-2	2号墓		壺片、甕片		Ⅳ	7	5.5			
	1号墓		壺片、甕片		Ⅳ					
KW93-2	2号墓	墳丘拡張型	壺片、高杯片、筒型土器、広口壺2	広口壺1(Ⅲ様式)	Ⅱ～Ⅲ					
	1号墓									
	2号墓	墳丘拡張型	壺片		継続					
	3号墓		長頸壺、短頸壺、蓋、甕、高杯		Ⅲ	11.5				
					Ⅱ					

加美方形周溝墓：財団法人大阪市文化財協会2001「加美遺跡方形周溝墓の葬送過程の復元」『大阪市文化財協会研究紀要第4号』

周溝墓	主体部	主体部タイプ	供献土器	穿孔	時期	墳丘規模(m)	棺規模(cm)	棺型式
1号墓	木棺墓1	空間占有型	甕2、広口壺、広口短頸壺、長頸壺	広口短頸壺1	Ⅲ～Ⅳ	6.5以上	8	
	木棺墓2	拡張型	ミニチュア鉢、ミニチュア壺	広口長頸壺1				
2号墓	木棺墓1	拡張型	甕2、広口短頸壺、広口壺2、ミニチュア鉢	広口短頸壺1	Ⅲ			
	木棺墓2			広口壺1				
	木棺墓3							
	土器棺							

大阪市文化財協会1999「瓜破遺跡」『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告—1997年度—』、大阪市文化財協会1983「瓜破遺跡」

周溝墓	主体部	主体部タイプ	供献土器	穿孔	時期	墳丘規模(m)	棺規模(cm)	棺型式
801号墓			甕	なし	Ⅱ	10	6	
802号墓			壺体部	なし?	Ⅱ			
83号墓	木棺墓1	不明	広口壺2、底部	なし	Ⅳ	10.3	5以上	120 40 I型
	土墳墓1							

大阪府教育委員会1994「喜志西遺跡発掘調査概報・Ⅲ」

周溝墓	主体部	主体部タイプ	供献土器	穿孔	時期	墳丘規模(m)	棺規模(cm)	棺型式
1号墓			壺体部、受口壺、高杯、土器片	壺体部	Ⅳ	5.3	4	
2号墓	木棺墓1	不明	3号間に広口壺、甕	甕	Ⅲ	5	4	Ⅱ型
3号墓	木棺墓2		鉢、高杯、長頸壺			7.7	6.2	Ⅱ型

大阪府教育委員会1989「成法寺遺跡発掘調査概報・Ⅳ」

周溝墓	主体部	主体部タイプ	供献土器	穿孔	時期	墳丘規模(m)	棺規模(cm)	棺型式
1号墓	木棺墓1	空間占有型			Ⅳ	13	13	170 55 Ⅱ型
	木棺墓2				Ⅳ			150 50 Ⅱ型
	木棺墓3				Ⅳ			Ⅱ型
	土器棺1				Ⅳ			
	土器棺2				Ⅳ			

中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会1971「瓜生堂遺跡」、瓜生堂調査会1981「瓜生堂遺跡Ⅲ」

周溝墓	主体部	主体部タイプ	供献土器	穿孔	時期	墳丘規模(m)	棺規模(cm)	棺型式
1号	不明		甕		Ⅳ	6	3以上	
3号			壺、鉢	不明	Ⅳ	8		
4号			細頸壺、甕、広口壺	不明	Ⅳ			
5号			広口壺3、高杯、鉢、甕	甕1	Ⅳ	8		
6号	木棺墓1	不明	甕、鉢、高杯	なし	Ⅳ	7	7	不明
7号			広口壺2、細頸壺、鉢	なし				
101号	木棺墓1	不明	細頸壺	細頸壺		15	8	110 40 I B型

亀井：大阪府教育委員会・大阪府文化財センター1993「河内平野遺跡群の動態Ⅵ」

周溝墓	主体部	主体部タイプ	供献土器	穿孔	時期	墳丘規模(m)	棺規模(cm)	棺型式
31区	1号	土器棺1	受口壺1、甕2、鉢、高杯3以上、広口壺口縁など	受口壺1	Ⅳ			
		土器棺2						
		土器棺3						
		土器棺4						

表24 摂津地域の方形周溝墓

方形周溝墓	時期	墳丘規模(m)	供献土器	穿孔	主体部	備考
勝部:豊中市教育委員会1971『勝部遺跡』						
1号	Ⅲ～Ⅳ		不明	不明	Ⅱ型木棺2基	空間分有型?
2号	Ⅲ～Ⅳ	10m以上	10m以上	不明	Ⅱ型8、Ⅰ型1基	空間占有型
勝部:豊中市教育委員会1995『勝部3次』『豊中市埋蔵文化財年報VOL.3』						
3次-1	Ⅳ	12	7	土器の詳細は不明	不明	土壇かⅡ型木棺が3基
蛭池北(宮の前):豊中市教育委員会・蛭池北調査団1995『蛭池北遺跡(宮の前遺跡)』						
1号	Ⅲ	8.5		長頸壺、甕		
2号	Ⅱ	5		長頸壺3、甕、脚部	長頸壺	
3号	Ⅲ	8.7	7.6	甕、高杯、壺、無頸壺など多数。供献か不明		溝内:Ⅱ型2基
4号	Ⅲ			長頸壺、甕、高杯など多数。供献か不明		
5号	Ⅲ	7.6		広口壺2、甕、土器片		
6号	Ⅲ		6.9	土壇より無頸壺、甕、水差、壺など。		墳丘端に土壇墓1
7号	Ⅳ			受口壺、無頸壺、甕		大量投棄有
*他にⅡ型木棺を納めたと考えられる墓壇2基						
田能:尼崎市教育委員会1982『田能遺跡発掘調査報告書』						
3号	Ⅳ	17以上		広口壺、無頸壺、鉢、水差、高杯、甕	水差	Ⅱ型2基(朱、管玉600以上、銅剣)
東奈良:東奈良遺跡調査会1979『東奈良 発掘調査概報Ⅰ』						
F-1号	Ⅳ	7.6	6	広口壺10、台付鉢7、高杯、水差(南溝で朱塗有)	水差	Ⅱ型2基、土壇5基、溝内土壇3基
				広口壺、受口壺、台付鉢、把手付壺、甕等(北溝)		空間占有型
A-1号	Ⅲ	10	6	長頸壺、細頸壺2、壺口縁、高杯、甕等	細頸壺2	
A-2号	Ⅲ?	9.5	7			
A-3号	Ⅲ?	6	5			
A-4号	Ⅲ?	7	6.5			
A-5号	Ⅲ	13	10.5			
東奈良:財団法人大阪府文化財調査研究センター1990『東奈良遺跡』						
558-OG	Ⅳ	8.5	3.8	Ⅳ様式土器の大量投棄		中心に土壇?
559-OG	Ⅳ	7.5	5	甕、高杯の破片		中心にⅡ型木棺1基
560-OG	Ⅳ	5.6	4.8	Ⅳ様式土器の大量投棄		中心に土壇?
561-OG	Ⅳ	6	4.9	台付壺、甕、蓋		中心にⅡ型木棺1基、Ⅰ型木棺1基
郡:茨木市教育委員会1978『茨木市郡遺跡発掘調査概報』						
KNF-1	Ⅱ	12	8	無頸壺、壺体部		
KH-5		9	9			
KH-6	中期	9	9			
KH-7		5	5			
KH-8		5.5	5.5			
KH-9		5	5			
安満9地区:高槻市教育委員会1977『安満遺跡発掘調査報告書—9地区の調査—』						
A1	Ⅱ			長頸壺		
A2	Ⅱ	5	4.4			
A3	Ⅱ	8.8	7.7	短頸壺、甕		
A3-2		3	3			
A4	Ⅱ	7.8	6.8	甕		記載では土壇5。Ⅱ型の可能性も
A5	Ⅱ	5.3	5.1	長頸壺、甕		空間分有型?
A5-2	Ⅱ	8	8	溝上層にⅤ様式に土器の一括廃棄		Ⅴの大量投棄
A6	Ⅱ	6	6			
B1	Ⅱ	7		台付鉢		
B2	Ⅱ	7	7	壺片		
B3	Ⅱ	7	5.8		中心に土壇墓1	単数型
B3-2	Ⅱ	6	6	壺体部、甕2		
B4	Ⅱ	5.5	5.2		墳丘端に土壇墓2	
B4-2	Ⅱ	4.3	4.2	広口壺2、甕1	広口壺1	空間占有型
B5	Ⅱ	7.5	6.5		中心と墳丘端の計2基の土壇	
安満2区:高槻市1973『高槻市史第6巻』						
	Ⅳ	7	7	壺7		Ⅱ型木棺3基、溝に土器棺
安満Ⅴ区:高槻市教育委員会1981～1984『高槻市文化財調査概要Ⅴ～Ⅶ』						
1		8.5				
2	Ⅱ～Ⅲ	6	6	甕		
3	Ⅱ～Ⅲ			壺、水差、甕		
4		7.6				
5						
6						
7						
8	Ⅱ	7.2	6.5	壺、甕		
9	Ⅱ			壺		
10	Ⅱ	4.5	3.5	甕		
11		3.7	3			
12		7.5	5.5			

13	Ⅱ～Ⅲ	9	7	壺、甕、高杯			
14	Ⅱ	8.5	7.5	壺、高杯、鉢			
15	Ⅱ			壺		墳丘の端よりに土壇墓1	
16	Ⅱ	7.5	5.5	壺			
17	Ⅱ～Ⅲ	6		壺、高杯			
18							
19	Ⅱ～Ⅲ	9.5	7	壺、甕、蓋			
20	Ⅱ			無頭壺			
21		9.5	7				
22							
23	Ⅱ	9	6.5	壺、鉢			
24	Ⅱ	8	7.5	壺、甕			
25							
26		10	9				
27	Ⅱ			壺、甕			
28		5	4				
29		5					
30							
31		7					
32		5	5		中心にⅡ型木棺		単数型
33	Ⅱ	5	5	壺			
34		6.5		壺2			
35		7		壺2、甕1			
36		9.5	9	壺2、甕1			
37		3.5					
38		7		壺2、甕1、鉢1			
39							
40		8.5	7	壺口縁片			
41							
42							
43							

群家川西：高槻市教育委員会1971・1973『嶋上郡遺跡発掘調査概要Ⅰ・Ⅲ』
大阪府教育委員会1973・1975『嶋上郡遺跡発掘調査概要Ⅲ・Ⅴ』

38-K・1	Ⅱ	12	10	壺		中央にⅡ型2基、溝にⅠ型1基	
38-K・2	Ⅱ	12	12	*木棺に朱		中央にⅡ型、墳丘端と溝に土壇	空間占有型
38-K・3							
38-K・4	Ⅱ			壺、高杯			
38-K・5	Ⅱ	14	11		中央にⅡ型木棺		単数型
48-E・1		10			土壇		
48-E・2	Ⅳ	12			墳丘に土壇3、溝内に土壇1		空間分有型
48-E・3		9					
74-H	Ⅲ			壺、甕、水差			
16-B・1	Ⅳ			鉢、高杯、壺			
16-B・2							
16-B・3							
6-I・4	Ⅲ	7	7	土器片			
6-I・5							
38-M・N	Ⅴ			壺、壺			

森小路：1982『西日本における方形周溝墓をめぐる諸問題』第11回埋蔵文化財研究会
80-12次 Ⅲ後半 壺3、甕5、水差 壺1

原田西：兵庫県教育委員会1981・83『兵庫県埋蔵文化財年報昭和56年・58年』

1	Ⅲ			*全て詳細不明			
2	Ⅲ	10.3	9.8		木棺3+α		空間占有型？
3	Ⅲ				木棺2+α		空間分有型？
4	Ⅲ	6.9	5.6				
5	Ⅲ	15.1	12.3	壺、高杯			
6	Ⅲ	11.2	9.8				
7	Ⅲ						
9	Ⅲ	7.1					
10	Ⅲ	7.5	5.7				
11	Ⅲ	12.3	10.5				

加茂遺跡：関西大学1967『摂津加茂』

川西市教育委員会1996・1997『平成7・8年度川西市発掘調査概要報告』							
1967-1	Ⅳ	8	5	細頸壺	細頸壺		
150次-1	Ⅳ	9.6		広口壺、高杯、土器片		中心にⅡ型2、溝にⅡ型2、他土壇	空間占有型
150次-2	Ⅳ			広口壺、高杯、土器片		Ⅱ型木棺、土壇	
151次-1	Ⅳ			広口壺、器台、高杯など		Ⅱ型木棺2基	土器投棄か？
153次-1	Ⅲ	10.2	6以上	受口壺2、広口壺、高杯、甕など		中心以外に土壇墓3	
153次-2	Ⅲ	7.3	5.8	高杯など		中心に土壇墓3基	空間占有型
153次-3	Ⅳ			壺、高杯			
153次-4	Ⅳ			広口壺	広口壺1	周溝内に土壇墓	大量投棄
				広口壺、水差、細頸壺、短頸壺、高杯、甕、鉢多数			

下加茂：兵庫県教育委員会1994『下加茂遺跡』

ST1	Ⅲ	11	8.6以上	広口壺2	広口壺		
ST2	Ⅲ	12.5	8以上	広口壺2			

武庫之荘：尼崎市教育委員会1994・1995『平成3・4年度尼崎市埋蔵文化財年報』

5次-1	Ⅲ	9.5	9.5	広口壺、甕、高杯			
22次-1	Ⅳ	12	10	広口壺、甕、高杯		中心にⅡ型木棺と土壌墓	

雲井：兵庫県教育委員会1991『雲井遺跡第1次発掘調査報告書』

1	Ⅳ	13	12	広口壺、甕、水差、無頭壺、長頸壺6(投棄を含む)	長頸壺2	中心にⅡ型木棺	単数型
2	Ⅳ	10	7	広口壺、甕		中心に土壌orⅡ型木棺	単数型
3	Ⅳ	7	5	広口壺、甕、長頸壺		中心にⅡ型木棺	単数型
4	Ⅳ	9.5	7	広口壺3、長頸壺	広口壺	中心に土壌orⅡ型木棺	単数型
5	Ⅳ	10	6	広口壺2、長頸壺2、高杯	長頸壺1	溝内にⅡ型木棺	
6	Ⅳ				広口壺1		
他の埋葬施設							
ST01	Ⅳ					Ⅱ型木棺	
ST02	Ⅳ					Ⅱ型木棺	
ST03	Ⅳ					Ⅱ型木棺	
ST04	Ⅳ			広口壺2、長頸壺3	広口壺1	Ⅱ型木棺	
ST05	Ⅳ				長頸壺1	Ⅱ型木棺	

* 正確には胴部下半穿孔は3点ほどで胴部最大径での大きめの円形穿孔が多い。河内などは様相を異にする。

楠・荒田町：神戸市教育委員会1980『楠・荒田遺跡発掘調査報告書』

楠・荒田町：神戸市教育委員会1990『楠・荒田遺跡発掘調査報告書Ⅲ』

3次-1	Ⅳ	12	8	広口壺3、壺口縁、蓋	広口壺1	中心にⅡ型木棺	単数型
* 多量の供献土器とともに、体部上半や頭部近くに穿孔をした広口壺が1点ある。 * 1次調査ではⅣ様式のⅠ型木棺3基検出							
12次-1	Ⅲ	12	4以上	広口壺3、甕片など	広口壺1		
13次-1							
13次-2	Ⅳ	12	8.5	広口壺2、把手付直口壺、高杯2		中心にⅡ型木棺	単数型
13次-3							
13次-4	Ⅳ	10以上	8以上	甕、高杯など		中心にⅡ型3基、元溝にⅡ型1基	墳丘拡張？

出合：神戸市教育委員会1994『出合遺跡』

ST01		5	4.5			中心にⅡ型木棺	単数型
ST02	Ⅲ	5.1	3.7	甕		中心にⅡ型木棺	単数型
ST03	Ⅲ	8.1	6.6	広口壺2、短頸壺		中心にⅡ型木棺、溝に土壌1基	単数型
ST04		4以上				中心にⅠ型木棺	単数型
ST05						中心にⅡ型木棺2基	空間占有型
ST06							

表25 山城地域の方形周溝墓

方形周溝墓	時期	墳丘規模(m)	供献土器	穿孔	主体部	備考
神足：長岡京市教育委員会1980『長岡京第九小学校建設にともなう発掘調査概要』『長岡京市文化財調査報告第5冊』						
第1号	Ⅱ～Ⅲ	14.5	13.5	土器片が多いが供献かは不明		
第2号	Ⅱ～Ⅲ	13	12.5	土器片が供献かは不明		
第3号	Ⅱ	5.1	4.4	長頸壺片、供献かは不明		
第4号	Ⅱ			土器片が供献かは不明		
第5号	Ⅱ	15.7	9.6	長頸壺	中央に土壌？	単数型？
第6号	Ⅲ			甕2、広口壺、水差	溝に土器棺	
第7号						
第8号		8.9	7.3			
神足：長岡京市教育委員会1983『長岡京跡右京第39次』『長岡京市文化財調査報告第11冊』						
3911	Ⅱ	10.5	8	長頸壺3、土器片	中央にⅡ型木棺	単数型
3941	Ⅱ	9.3	5.5	甕		
神足：長岡京市埋蔵文化センター1987『長岡京跡右京域の調査：右京第187次』『長岡京市埋蔵文化財センター年報昭和60年度』						
第1号						
第2号		5	4.2			
第3号						
第4号		5.5	4			
第5号		7.5				
第6号		7.5				
第7号		3	3			
第8号		5	4			
第9号		6	5		中央1基	単数型
第10号		4.2				
第11号		6以上	3.7		中央2基	空間占有型？
神足：長岡京市埋蔵文化財センター1989『右京第290次』『長岡京市埋蔵文化財センター年報昭和62年度』						
SX01	Ⅱ末	10	9	広口壺	中心にⅠ型木棺	単数型
SX04		8				
SX05					周溝に土器棺	
神足：長岡京市埋蔵文化財センター1991『右京第338次』『長岡京市埋蔵文化財センター年報平成元年度』						
1号	Ⅳ？	9	7.5	土器	不明	中央1基、周溝土器棺
2号	Ⅳ					
3号						
4号	Ⅱ	7.5	3以上	無頭壺、広口壺		周溝に土壌
5号	Ⅳ？	7	4以上			周溝に土器棺

神足：長岡京市埋蔵文化財センター1991「右京第339次」『長岡京市埋蔵文化財センター年報平成元年度』							
1号		6.8	4.8			中央に1基	単数型
2号		4.8	4			中央に1基	単数型
3号							
4号							
5号							
6号		6	4			中央にⅠ型木棺	単数型
7号		8	5.6				
8号							
9号							
10号							
11号							
12号							
神足：長岡京市埋蔵文化財センター1997「右京第494次」『長岡京市埋蔵文化財センター年報平成7年度』							
SX42	Ⅲ	9.5	8.5	壺、甕片			
SX53	Ⅲ	12	12	広口壺、壺片、供献かは不明			
SX54	Ⅲ	8以上	8	広口壺片、供献かは不明		周溝に土壌？	
神足：長岡京市埋蔵文化財センター2002「長岡京市埋蔵文化財調査報告書第26集」							
SX161	Ⅱ～	8	7			中央にⅠ型木棺	単数型
SX162	Ⅱ～	6.5	6				
SX164	Ⅱ～	6以上	6.1	広口壺			
SX163	Ⅱ～	6.4	6				
SX167	Ⅱ～	5.5	5.5				
SX166	Ⅱ～	9.5	9				
SX172	Ⅱ～	6.7	5.3				
SX169	Ⅱ～			壺、甕、ミニチュアなど。供献かは不明		中央に1基	単数型
SX165	Ⅱ～	11	11	壺、甕、壺蓋、甕蓋		6基の土壌の可能性	
SX173	Ⅱ～						
SX62	Ⅱ～						
SX502	Ⅳ	9→13	13	広口壺8以上、細頸壺2以上、甕、水差	広口壺	主体部2、拡張後+1	拡張型
SX503	Ⅳ	8.5	7.8	甕、水差		主体部西よりに1基	
SX28	Ⅳ	7.6	4.8以上	広口壺、把手付壺、直口壺、高杯、甕蓋		中央にⅡ型木棺	単数型
SX30	Ⅱ～						
SX77	Ⅳ	5	4	広口壺、台付細頸壺、無頸壺		主体部中央2基	空間占有型
SX140	Ⅳ			広口壺2、甕			
神足：長岡京市埋蔵文化財センター2000「長岡京跡右京第664次神足遺跡発掘調査報告書」『長岡京市埋蔵文化財調査報告書第16集』							
仮001	Ⅳ	12	7.5以上	壺4、甕、供献かは不明		中央2基？	
仮002	Ⅳ	12		台付直口壺、広口壺2以上、壺4以上		中央2基？	
仮003	Ⅳ	7.5	4.5以上	水差2、甕、広口壺、高杯、高杯片2		中央1基以上	
神足：長岡京市埋蔵文化財センター2000「長岡京跡右京第696次発掘調査報告書」『長岡京市埋蔵文化財調査報告書第22集』							
SX028	Ⅱ	12	9.5	甕片、壺片、供献かは不明			
SX029							
SX030							
SX031	Ⅱ			長頸壺	長頸壺		
SX032							
神足：長岡京市埋蔵文化財センター2003「長岡京跡右京第766次発掘調査報告書」『長岡京市埋蔵文化財調査報告書第33集』							
1	Ⅲ	9以上	6以上	長頸広口壺2、ミニチュア壺	長頸広口壺		壺の中に
2	Ⅲ	5以上	6以上	方形周溝墓1か2に供献			ミニチュア壺
下植野南：京都府埋蔵文化財調査研究センター2001「名神大山崎ジャンクション関係遺跡」『京都府遺跡調査概報第101冊』							
京都府埋蔵文化財調査研究センター2000「名神大山崎ジャンクション関係平成11年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報第95冊』							
京都府埋蔵文化財調査研究センター1999「名神大山崎ジャンクション関係平成10年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報第90冊』							
大山崎町教育委員会1996「下植野南遺跡長岡京右京第188次調査報告」							
STF180	Ⅲ古	11	8.5	広口壺4、甕2、高杯2、ミニチュア壺			
STF181		10.5	8			中央にⅡ型木棺2基	空間占有型
STF183		5.5	5.5				
STF184		10	8.5	広口壺		北側に偏りⅡ型or土壌1	
STF185		11.5	7.5	甕5		ほぼ中央にⅡ型1基	単数型
STF186		14.5	11.5				
STF187		5.6	5.5			溝内にⅡ型木棺1基	
STF188		6					
STF189		6					
STF190		6.5	5.5				
STF191							
STF192		7.5	7	広口壺2、甕3			
STF193		7.5	4.5	広口壺2、甕		中央に直交する形でⅡ型2基	空間占有型
STF194		7.5	5.5			ほぼ中央に土壌1基	単数型
STF195							
STF196		7.5	3.5				
STF198		9.3	8				
STF206				甕、鉢、鉢			
STG50		10.6	9.4	広口壺、甕			
STG52				甕、			
STG53		11.5	11.2				
STG65		7.3	6.9	広口壺片		中央にⅠ型木棺	単数型
STG84		6.3	6				

STG94		7	6.7	短頸壺?、広口壺、高杯			
STI12		7.4	6.5				
STI14		8	6.5		中央にⅠ型木棺	単数型	
STI15		7.5	6.2				
STI17		6.5	5.9				
STJ34		4.2	3.8				
STJ02		8.5	8.4	甕、短頸壺			
STJ03		9.5	9	広口壺			
STJ04		8.5	8.2		中央に土壌	単数型	
STJ05		10.9	8.8		南東よりに土壌?		
STJ18		7.8	7				
STJ19		7.5	7.4				
STJ20		7.2	7.1	無頸壺			
STJ48		7.8	7.3	無頸壺			
STJ51		6.4	6.3		南東に偏りⅠ型1基		
STJ52		9	7.3				
STJ60		9	5.9				
STJ83		10.9	6.4				
STJ84		6.9	6.6		中央にⅡ型1基	単数型	
STJ87		7.2	6	広口壺・水差(摂津型)	中央にⅡ型1基	単数型	
STJ88		9	7.7		北に偏りⅡ型1基		
STJ89		8.7	7.4		中央にⅡ型1基	単数型	
STJ90		7.6	6		ほぼ中央にⅠ型1基	単数型	
STJ91		6.7	6.7				
STJ95		11.5	8.9		Ⅰ型1基、Ⅱ型3基		
STJ98		8.3	6.7				
STJ99		7.6	6		中央にⅠ型1基	単数型	
STJ100		6.7	6.7	広口壺	中央に土壌?	単数型?	
STJ104		7	6.8				
STJ105		6.9	6	広口壺2			
STJ106		5.4	4.3				
STJ124		10.2	8.6				
STJ127					Ⅰ型2基		
STJ128		9	4.5				
STJ129		16.6	12.5				
STJ132		9.4	7.8				
STJ133		9.4	8.1		Ⅰ型2基、Ⅱ型2基		
STJ137							
STJ158		9.5	8.5				
STJ161		6	3.8				
STJ163							

鶏冠井清水:京都府埋蔵文化財調査研究センター1998「長岡京跡左京第400次」『京都府遺跡調査概報第80冊』

1	Ⅱ後半	10	8.5	広口壺2、長頸壺1、無頸壺1、他壺2			
2	Ⅱ後半	12	12	広口壺、鉢			
3	Ⅱ後半	5.5	5.5	広口壺体部			
4	Ⅱ後?	4	4				

幸水:八幡市教育委員会1998「八幡市埋蔵文化財発掘調査概報」

1	Ⅳ	8	8	細頸壺4、広口壺2、水差、ミニチュア壺	細頸壺1		
				甕2、高杯2、台付鉢、他	水差1、甕1		
2		10.7		高杯			
5	Ⅳ			受口壺			
6						Ⅰ型orⅠB型3基	
9		9					
10		7.4					
12	Ⅳ			広口壺3	広口壺1		
15		6	6			* 周溝墓以外の木棺はⅡ型木棺3基	

南栗ヶ塚:長岡京市教育委員会1983「長岡京跡右京第39次(7ANQMK地区)調査概要」『長岡京市文化財調査報告第11冊』

3911	Ⅱ	10.5	8	広口長頸壺3、広口壺1、底部片	なし	中央にⅡ型1基	単数型
3912	Ⅱ?	6.8	4.2				
3913	Ⅱ?	4	3以上				
3914	Ⅱ	9.3	5.5	甕2	なし		
3915	Ⅱ?	4.5以上	3以上				
3916	Ⅱ	5.5	5.5				

東土川:京都府埋蔵文化財調査研究センター2000「京都府遺跡調査報告書第28冊」

ST329011		9.6	6				
ST336014	Ⅲ	5.8	5.5	広口壺			
ST337011		7	7				
SD337012							
SD385623	Ⅳ			器台脚部			
ST363113	Ⅲ	17	15	長頸壺3、短頸壺		溝内に土壌墓1	
ST363112	Ⅳ	12	8以上	無頸壺			
SD361161							
ST361159	Ⅲ	12	8以上	広口長頸壺			
ST361160	Ⅲ~Ⅳ	13以上		甕、底部片			
ST363106	Ⅳ	15	15	受口壺、水差	水差		
ST385619	Ⅳ			近江系甕、広口短頸壺、広口壺		溝内1:ベンガラ・石鍬11・石剣	Ⅰ型変形
ST385614	Ⅲ	13.7	10	摂津系水差		溝内に土壌墓1	

ST385615	Ⅲ	11	9.5	広口壺			
ST385616	Ⅲ	11.9	9	高杯			
SD385336	Ⅲ			近江系甕、広口短頸壺、甕			
ST399602	V	10.4	9.8	広口壺、高杯			
SD399607							
SD399609							
SD399610							
SD399611							
ST384115	Ⅲ	11.4	11.4	広口短頸壺、鉢			
ST384114	Ⅲ	10.1	9.8	広口壺2、甕、細頸壺		溝内に土墳墓1	
ST384118							
佐山尼垣外：京都府埋蔵文化財調査研究センター2001『京都府遺跡調査報告書第31冊』							
ST101	Ⅲ	11	7	広口壺2、細頸壺1、鉢1、甕2、高杯1	なし		
ST102		7	7				
ST114		10	6				
ST119	Ⅲ～Ⅳ	9	7	広口壺(シカ線刻入)、細頸壺2、水差、短頸壺、広口壺、他 *広口壺などに西根の模様。細頸壺の1点には底部穿孔、胴部穿孔がみられる。底部については整った孔であることから、集落などにでる実用具と考えられる。	細頸壺1	溝内に土墳3基。墓域の可能性	胴部中位の穿孔
ST227	V	11	11	広口壺、細頸壺、把手付鉢、台付鉢、短頸壺、他			
ST228	中期?	18	13				
ST236	Ⅲ以前	19	14				
ST237	Ⅱ	14	11	広口長頸壺1	広口長頸壺1		
ST238		14	14				

表26 大和地域の方形周溝墓

方形周溝墓	時期	墳丘規模(m)	供献土器	穿孔	主体部	備考
菅原東：奈良市教育委員会1990『平城京左京三條一坪の調査第173次』『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成元年度』						
SX-01	Ⅲ	5	5			
SX-02	Ⅲ	5	5			
SX-03	Ⅲ	5	5			
SX-04	Ⅲ	9	12			
SX-05	Ⅲ	9	12			
杏：奈良市教育委員会1988『平城京第134次調査』『奈良市埋蔵文化財発掘調査概要報告書昭和62年度』						
ST-06	Ⅱ	16以上	13以上			
柏木：奈良市教育委員会1998『平城京左京五條一坊十六坪の調査第338・370次』『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成9年度(第2分冊)』						
1号墓	Ⅱ～Ⅲ	3以上	5	*全体的に土器はいくつか出土して、いるが、穿孔のあるものはない可能性が高い	中心にⅠ型木棺	単数型
2号墓	Ⅱ～Ⅲ	9.4	8.2			
3号墓	Ⅱ～Ⅲ	7.5	6.8			
4号墓	Ⅱ～Ⅲ	9.5	5.5以上			
5号墓	Ⅱ～Ⅲ	8.7	6.9			
6号墓	Ⅱ～Ⅲ	11.5	10.5		中心にⅠ型木棺	単数型
7号墓	Ⅱ～Ⅲ	7			中心にⅠ型木棺	単数型
8号墓	Ⅱ～Ⅲ	11.5	6			
9号墓	Ⅱ～Ⅲ	14.2	11			
10号墓	Ⅱ～Ⅲ	9	7			
11号墓	Ⅱ～Ⅲ	8	6.5		中心にⅡ型木棺or土壇	単数型
12号墓	Ⅱ～Ⅲ	10以上	7以上			
13号墓	Ⅱ～Ⅲ	8	6			
14号墓	Ⅱ～Ⅲ	8	5.8			
15号墓	Ⅱ～Ⅲ	7.3	4			
16号墓	Ⅱ～Ⅲ	7.5	5			
17号墓	Ⅱ～Ⅲ	9	7			
18号墓	Ⅱ～Ⅲ	7.5	5.5			
小泉調練場：奈良県立橿原考古学研究所1983『奈良県遺跡調査概報1982年度』						
1号	Ⅲ?	5	4	壺	不明	
2号	Ⅲ?	5	5	壺、壺2(投棄)	不明	溝に土器棺
前栽：大和弥生文化の会1997『みずほ第21号』						
1号	Ⅲ新	11	8.5	供献土器あり	不明	
2号	Ⅲ新	10以上	9以上			
3号	Ⅲ新	7	6	供献土器あり	不明	
4号	Ⅲ新	9	6以上			
5号	Ⅲ新	11.6	8.5			
和爾：奈良県立橿原考古学研究所1983『和爾・森本遺跡』						
ST-01	Ⅲ	6		高杯		
ST-02	Ⅲ			細頸壺4、台付鉢、高杯、甕、蓋		大量投棄?
ST-04	Ⅲ?			不明		
西里：奈良県立橿原考古学研究所1986『西里遺跡』						
ST-01	Ⅳ	8		広口壺2、甕、土器片		溝に土器棺?

ST-02	IV	7	7	甕、広口壺片			
ST-03	IV			甕、広口壺片		溝に土器棺?	
清水風:奈良県立橿原考古学研究所1987『奈良県遺跡調査概報1986年度』							
ST-01	II	13		長頭壺			
田中庵寺:竹田政敬1994『田中庵寺下層の方形周溝墓について』『みずほ第12号』							
1次-1	IV			広口壺、甕、壺体部			
3次-1	III~IV	13.5	9.8	水差			
三河:奈良県立橿原考古学研究所1996『奈良県遺跡調査概報1995年度』							
ST-01		7.5	6以上				
ST-02		5.5以上	5以上				
ST-03	II	6.2	6	長頭壺	長頭壺		
ST-04		11	9.5				
ST-05	III	14	12	鉢			
ST-06	IV	13.5	10	無頭壺、台付鉢			
伴堂東:奈良県立橿原考古学研究所1996『奈良県遺跡調査概報1995年度』							
ST-03		12.5	8.1以上				
ST-05	II	10.8	9	長頭壺			
ST-06		8.2以上	6.3以上	壺			
ST-07		12.2	9.5				
土橋:大和弥生の会1997『みずほ第21号』							
1		12	11	壺、甕	不明		
2		10	8	壺、甕、水差	不明		
3		16	11	壺、甕、蓋	不明		
4		11	9	壺、甕、高杯	不明	溝に木棺?	
5		8	6	壺、甕、水差	不明		
6		15	11	壺、甕	不明		
7		10	9	壺	不明		
8		8	7	壺、甕	不明		
9				甕	不明		
10		13	11	壺、甕、高杯	不明		
11		15	13	壺、甕、高杯	不明		
12		9	9				
13		9					
14		4.5					
15							
16		10					
17		9	7				
18		10		壺、甕	不明		
19		9					
20		9		壺、甕、蓋	不明		
21				甕、高杯	不明		
22		4					
23							
24							
25		7					
矢部南:田原本町教育委員会2000『矢部南遺跡発掘調査報告』							
ST-01	IV			広口壺、細頸壺2、甕、高杯	広口壺		
ST-02	IV			広口壺3、甕、高杯、蓋	広口壺1、甕1		
阪手東:清水琢哉2003『阪手東遺跡第2次調査検出の方形周溝墓』『みずほ第38号』							
ST-101	III	10	8	広口壺、細頸壺2、甕、高杯	不明		
ST-102	III	9.6	9		不明		
ST-103	III	10以上	7.3		不明		
ST-104	III	10以上		広口長頸壺、鉢	不明		
ST-105	III	6.3			不明		
ST-106	III	10.6	7.6		不明		
ST-107	III	12.1	8.6	広口長頸壺、鉢、壺、甕	不明		
ST-108	III	9.5以上	7.1		不明		
ST-109	III	8.4		甕片	不明		
ST-110	III	8.2	6.1	甕、鉢、壺	不明		
ST-111	III	11.3	7.5	鉢、壺	不明		
ST-112	III				不明		
ST-113	III			甕	不明		
ST-114	III	14	11.8	壺、台付鉢、甕3	不明		
ST-115	III	5.2			不明		
ST-116	III			鉢片	不明		
羽子田:小池香津江2003『羽子田遺跡第20次調査の方形周溝墓』『みずほ第38号』							
SX-01				台付鉢、高杯、壺、甕、無頭壺、蓋	無頭壺		
SX-02				壺3	壺2		
SX-03				水差、台付鉢、壺、甕			
SX-04							
唐古・鍵:豆谷和之2003『唐古・鍵の方形周溝墓』『近畿弥生の会』							
1	II			長頭壺	不明		
2							

宮瀧・末永雅雄1986『宮瀧遺跡』

6次-11	IV	15	10	水差、台付鉢	水差		
6次-12	III	18	14				
6次-13	III	8					
6次-14	III	9					
6次-15	III	8					
6次-16	III						
6次-17	III	8.5以上					

表27 播磨地域（玉津田中遺跡）の方形周溝墓

兵庫県教育委員会1994『玉津田中遺跡―第1分冊―』

方形周溝墓	主体部	主体部タイプ	供献土器	穿孔	時期	墳丘規模 (m)	木棺規模 (cm)	棺型式
SX40001	木棺墓1 木棺墓2	空間占有	SX4005間に鉢1 広口壺口縁		III III	12 11	150 55 140 50	I型片小口 II型
SX40002	木棺墓1(墳丘南端)	不明	SX40010間に広口壺		III	8 5	142 56	II型
SX40003	木棺墓1(墳丘南端)	不明	SX40010間に広口壺3、甕1	広口壺2	III	7.5 7.5	40 27	II型
SX40004			SX40009間に細頸壺		III			
SX40005			SX40007間に広口壺		III	7.3 6		
SX40006	木棺墓1	中心単体	SX40009間に鉢。SX40010間に広口壺3		III	4.9 4.5	143 54	II型
SX40007	木棺墓1	中心単体	甕底部		III	7以上 8	170 60	II型
SX40009			SX40010間に広口壺2		III	7.3 6		
SX40010	木棺墓1 木棺墓2(管玉34副葬) 木棺墓1(溝内・銅剣先)	空間占有	SX40012間に甕。SX40013間に壺、鉢、蛸壺。 SX40014間に広口壺2、SX40020間に甕、壺 SX40017間に壺、甕10点以上、 * SX40010とSX40002の間の溝	広口壺3 細頸壺1	III	23 14	60 46 115 40	I型 II型 側板のみ溝
SX40011	木棺墓1(墳丘端)	不明	SX40012間に壺、鉢、高杯。SX40013間に鉢		III	8.8 6.1	105 50	I型
SX40012	木棺墓1	中心単体			III	10.5 7.5	170 63	II型
SX40013	木棺墓1(墳丘東端)	不明	広口壺、SX40014間に広口壺3、摂津型水差1、 甕、SX40016間に鉢、甕		III	11.5 11	146 55	II型
SX40014	木棺墓1 木棺墓2 木棺墓3(溝内)	空間占有	壺、SX40015間に広口壺、直口壺、短頸壺 * SX40014とSX40015の間の溝	広口壺	III	12.8 11	169 62 51 22 134 36	IB型 II型 II型
SX40015	木棺墓1 木棺墓2	空間占有			III		93 45 116 47	II型 II型
SX40016	木棺墓1				III	5	160 70	II型
SX40017	木棺墓1				III	11.5 9		
SX40018	木棺墓1 木棺墓2 木棺墓3 木棺墓4 木蓋土壇1(溝内) 木棺墓5(溝内)	空間分有	直口壺1 * SX40018とSX40040の間の溝		III	8.4 4.1	97 40 45 26 167 52 172 57 100 54	II型 II型 II型 I型 不明
SX40019					III			
SX40020					III	5.4 4.8		
SX40021	木棺墓1(管玉7)	中心単体	SX40022間に広口壺2、鉢、台形土器	広口壺	III	6.8 5.9	111 42	I型
SX40022	木棺墓1	中心単体	広口壺、甕。SX40027間に広口壺、直口壺 SX40028間に広口壺6	広口壺	III	12.3 9.5	142 56	II型
SX40023	木棺墓1	中心単体	SX40024間に壺、鉢、脚部。		III	10.4 6.5	117 58	II型
SX40024	木棺墓1(墳丘北側)	不明	SX40027間に壺、甕。SX40030間に広口壺、甕	広口壺	III	11 7.2	149 62	II型
SX40025			壺。SX40026間に広口壺、甕。SX40031間に鉢		III	7.5 6.7		
SX40026	木棺墓1(赤色顔料)	中心単体	壺、甕、蛸壺		III	6.7 4.8	102 26	II型
SX40027	木棺墓1(墳丘西側)	中心単体			III	4.4	134 61	IB型
SX40028			広口壺		III	6.2 4.2		
SX40030			SX40033間に壺、甕、鉢、脚部。 SX40034間に壺、甕。		III	8.1		
SX40031			SX40032間に広口壺、直口壺、摂津型水差		III	14.1		
SX40032	木棺墓(溝内)		* SX40032とSX40034の間の溝 SX40035間に壺多数、摂津型水差、高杯、 筒型土器		III	5.8	120 45	I型?
SX40033			細頸壺、広口壺、甕、高杯、蛸壺		III	9.5		
SX40034					III			
SX40035					III	10 6.8		
SX40036			SX40038間に広口壺	広口壺	III			
SX40037	木蓋土壇1(溝内)		* SX40037とSX40041の間の溝		III	10.5 10	106 56	
SX40038	木棺墓1 木棺墓2(墳丘北側)	空間占有	直口壺。SX40039間に広口壺、短頸壺、鉢、 台付鉢。SX40040間に広口壺。	広口壺	III	4.9 4.1	129 42 64 28	I型 IB型
SX40039			直口壺		III	4.3 3.9	132 45	II型
SX40040			直口壺		III			
SX40041			甕	甕	III			

* 溝の交点に木棺墓4基。II型木棺3、土甕墓1。

表28 近江地域（服部遺跡）の方形周溝墓

滋賀県埋蔵教育委員会・守山市教育委員会・滋賀県文化財保護協会1985『服部遺跡発掘調査報告書Ⅱ』						
方形周溝墓	時期	墳丘規模(m)	供献土器	穿孔	主体部	備考
M001	IV	14.5	7.9以上	細頸壺	細頸壺	
M002	IV	18.8	16.4	広口壺3、水差		
M003		8.3				
M004	IV	10	7.8	受口壺、広口壺D、高杯		広口壺D底部穿孔あり
M005	IV	10.5	9.2	広口壺2、直口壺		広口壺E009は摂津型か
M006	IV	9.1	7.5	細頸壺		
M007	IV	11.1	10	把手付直口壺	把手付直口壺	
M008	III	11.1	10.7	直口壺2、無頸壺、壺底部		底部残存しない
M009	IV	8.5	7.9	広口壺		
M010	III	11.7	11.1	受口壺3		
M011	IV	10.1以上	9.3	受口壺2、壺底部2		
M012	IV	10.9	9.3	受口壺2、壺底部2		底部穿孔
M013	IV	17.4	10.9	広口壺、直口壺、細頸壺		
M014						
M015	III	10.6	8.2	広口壺2、受口壺、壺体部	広口壺2	
M016		10.4	7.6			
M017	III	11	10.2	直口壺、壺体部		中央Ⅱ型
M018		8.1以上	7.2	壺底部		
M019	III	10.7	10.1	壺体部2		
M020	III	13.5	10.7	受口壺2、壺体部		
M021	III	12.6	9.8	受口壺2、壺体部2		
M022						
M023	III	4.3	4.3	壺体部		中央Ⅱ型3基
M024		10.3	8			空間占有型
M025		10.5以上	6.5以上			
M026		8.1	8			
M027		12.7	10.7			
M028	III	6.8	5.7	甕		
M029	III	7.6	6.3	広口壺		
M030	III	10.3	7.6			中央Ⅰ型？
M031		9.5	7.5			中央Ⅱ型
M032	III	6.1	5.4	直口壺2、高杯、壺体部		中央Ⅰ基、端Ⅰ基
M033	III	5.9	4.7	細頸壺		中央Ⅰ基、端Ⅰ基
M034	III	2.8	1.9	壺体部		中央Ⅰ基
M035	III	4.1	3.3	直口壺		中央Ⅰ基
M036	III	4.7以上	3.2	受口壺	受口壺	中央Ⅰ基、東に1
M037		6	5.6			中央Ⅰ基、北に2
M038		6.1	4.1			中央Ⅰ基
M039		10.8	8			中央Ⅰ基
M040		8	5.1			
M041		7.5	7			中央Ⅰ基、端Ⅱ基
M042		5	3			
M043		6.2	5.5			
M044		5	4.5			
M045						
M046		7	5.2			
M047		5.6	5.1			
M048		4.2	3.3			中央Ⅰ基
M049		6	3.9			
M050		4.3	3.4			中央Ⅰ基
M051		8.3	7	壺体部		
M052	III	8.6	6以上	広口壺、受口壺、鉢、壺底部2、脚		端に土壇1？
M053		6	5.2			中央Ⅰ基
M054		4	3			
M055	II	9.8	6.5	広口壺		
M056		4.1	3.6			
M057		5.7	4.8			
M058						
M059		10.4	4.9		土壇2	不明
M060		9.4	7.5			
M061		6.2	1.1以上			
M062		3.5	2.2			
M063		4.3	4			
M064	III	3.5	3.4	受口壺		
M065	II	3.4	2.6	直口壺		
M066		7.2	5.9	壺底部		
M067		6.8	2.7以上			
M068		5.5以上	4			
M069	III	6.2	5.5	受口壺		
M070		12.5	8			中央Ⅰ基
M071		6.7	6.6			
M072		3.5	0.6			
M073		4.5	3			
M074		8.5	5.5			
M075						
M076		9.2	5			中央Ⅰ基
M077		5.2				

M078							
M079		8.1	5.8				
M080		7.2	4.5			中央に1基	
M081		4.2	3.5			中央に1基	
M082							
M083	III	5	4	甕、高杯、壺体部2			
M084	II	8.9	8.8以上	直口壺		中央に1基?	底部非残存
M085	II	12.7以上	8.8以上	甕		中央に1基?	底部非残存
M086							底部非残存
M087	V	12.7	9.5	受口壺			底部非残存
M088							
M089	IV	11以上	8.5以上	壺底部			152頁誤
M090	II			甕			
M091							
M092							
M093							
M094		7.6	6				
M095							
M096		4.9	4.7				
M097							
M098		6.1	4				
M099		7.5	6			中央木棺1	
M100		9.2	6.2	底部			
M101	II	8	6.2	広口壺、壺底部			広口壺底部非残存
M102							
M103							
M104							
M105	II	6.1	5.2	甕			底部非残存
M106	II~III	7.8	6.4	壺体部			
M107	II	11.9	6.4	広口壺、壺頸部			広口壺底部非残存
M108	III	10.7	7.2	広口壺、受口壺、壺底部			
M109		3.1	3				
M110	II?	12	9.1	鉢		木棺2基	空間分有型
M111		7	6.5				
M112		6	5				
M113		4.5	3.7	壺底部		中央に1基?	
M114		8.8	5.2	底部			
M115		7.8	7.3				
M116		7.1	5.3				
M117							
M118		7.1	4.6	広口壺口縁部、壺底部2			
M119		5.7	4.2				
M120		3.6	3.1				
M121	II	2.6	2	広口壺、壺底部		中央にI型木棺	
M122	II	9.7	6.5以上	鉢		中央に木棺1、端に木棺1	空間占有型
M123	II	10	6.5	壺体部、底部			
M124	II	5.5	4.8	甕、壺体部、壺底部、広口壺口縁部			
M125		5	3.5以上				
M126		15	11.6			中央木棺1	
M127		8	5.7				
M128							
M129		11.5	11				
M130		11.4	8.7				
M131		7	5.5				
M132		4	3.4				
M133		5.5	4.8				
M134		5.4	3.4				
M135							
M136		5.2	4				
M137		3.6	2.8			東よりに木棺1基	
M138		3.1	2.8			中央木棺1基	
M139	III	4.2	3.6	無頸壺、壺底部			
M140		7.8	5.6			両端に木棺2基	空間分有型?
M141		4.8	4.2			中央1基	
M142	II	12.6以上	6以上	広口壺2			底部非残存
M143	II~IV	7.1	5.3	広口壺、壺底部2、甕口縁部		中央1基	
M144		10.1	6.5			中央1基	
M145		6.2	3.7			中央に1基、端に1基	空間占有型
M146							
M147		7	2.7以上				
M148							
M149		4.1	3				
M150		8.4	6.5			中央に木棺1、東にI B型木棺	空間占有型
M151	II	8.7	8.1	広口壺		中央1基	
M152	II	10	5.7	鉢、広口壺	鉢	中央木棺1基	
M153		4.5	4.1				
M154	II	8.9	5.4	直口壺		中央木棺1基	
M155		5	3.5			中央1基?	
M156	II	13.2	10.8	広口壺3、壺体部、甕口縁部2	壺体部	木棺3	空間分有型?

M157						
M158	II	12.1	7.5	広口壺、壺体部	中央1基?	
M159				壺体部		
M160	II			広口壺		
M161						
M162		5.2	3		中央木棺1基	
M163		8.4	5.6			
M164						
M165						
M166						
M167	II	11	8.7	直口壺、広口壺、甕、鉢、壺底部	西側で木棺1、土壇2	空間分有型?
M168		2.8	2.7			
M169	III	3.4	2.8	受口壺、甕、壺底部		底部非残存
M170	II	15.5	10	広口壺3、直口壺、壺体部、鉢	端に木棺1基	不明
M171		4.6	3.5			
M172		9以上	7.3以上			
M173						
M174		9.5	6.8		中央に木棺1	
M175		8.5	7.5			
M176		12.1	8.2			
M177		10	7.9			
M178		4.5	2.8			
M179	II	8.3	5.5	直口壺		
M180		5	2.7			
M181						
M182	IV	4.5	4.4	(ミニチュア無頸壺)	中央1基	主体部に入る
M183		3.6	2.4			
M184		5.7	4			
M185		10.2	8			
M186	III	7.8	5.4	広口壺		
M187		15.2	9.2			
M188	II	15.8	12.1	広口壺口縁部		底部非残存
M189		5以上	3.7以上			
M190		5.7	0.3			
M191	II			甕		底部非残存
M192	III	11.3	9.6	受口壺2、壺底部2		
M193						
M194		3.2	3.2			
M195		4	3.3			
M196		8.6	5.7			
M197						
M198						
M199	II	5.8	5	広口壺、壺底部		広口壺底部非残存
M200	III	11.2	7.7	直口壺		底部非残存
M201						
M202		8.3	6.3			
M203						
M204		2.5	1.8以上			
M205						
M206						
M207		12.1	10			
M208						
M209		3.5	2.8以上			
M210						
M211		7.1	5			
M212		10以上	7.3			
M213						
M214						
M215						
M216		5.4	5.2			
M217						
M218						
M219						
M220						
M221		14.5	9			
M222	II	10.7	3.5以上	甕		
M223	III	5	4.9	壺体部、壺底部		
M224		3.4	1.6			
M225		6.6	4.4			
M226						
M227		5.5	4.6			
M228		4.9	3.7以上			
M229		4	2.8以上			
M230		4	3.3			
M231		9.5	4.2			
M232		7.4	2.1以上	壺底部		
M233		7.8	4.5			
M234		9.5	4.7以上			
M235		6.2	3.3以上			
M236		7.5	6			
M237		6.1	4.3以上			

M238	IV	8.1	7以上	鉢、受口壺4、甕2、高杯2、脚等		
M239		9.3	8			
M240		7	5.8	壺底部		
M241		13.9	8.6以上			
M242		7.9	3.9以上			
M243		6.8	6			
M244		6.1	1.7以上			
M245		5.3	4.7以上			
M246		4.5	4.1			
M247						
M248		4.2	3			
M249		3.6	3.6			
M250		5.3	3.5			
M251						
M252		4.4	3.6			
M253		6	4.6			
M254		4.9	4			
M255		7.1	4.8			
M256	II	12.1	6	直口壺、壺体部		
M257		8.8	6以上			
M258		7.1以上	5.3以上			
M259		9.5	5.5以上			
M260		4	2			
M261		5.5	4.2			
M262		5.6	4			
M263	III	7.5	5.9	受口壺、広口壺、直口壺、鉢		
M264		6.1	5.2			
M265		6.4	2.6			
M266	II	9.3	7.7	広口壺		
M267	II	11.2	9.1	鉢2		
M268		7.5	5.7			
M269						
M270						
M271		3.9	3.3			
M272		4.6	3.4			
M273	III	7.1	6	広口壺	中央I基	
M274	IV	9.8	7.2	受口壺		
M275		10.8	8.3		中央にI型木棺	
M276	II	12.6	8.3	直口壺、壺底部		
M277		6.7	5.8			
M278		4.7	4.3以上			
M279		5.6	1.3以上			
M280		6.5	5			
M281		5.1	3			
M282		4.3	3.8			
M283		6.9	6.1			
M284		7.3	6			
M285		2.3	2以上			
M286		10.1	7.4			
M287		7.9	7.3			
M288		8.2	6.5			
M289		13.2	5.9		中央に木棺I	
M290	III	15.1	10.2	受口壺、壺底部		受口壺底部非残存
M291	III	14	12	広口壺、甕、壺底部		底部非残存
M292		7.3	6.7			
M293		10	8.6			
M294		6.3	3.6			
M295		7.5	3.5			
M296						
M297		7.5	5.5			
M298						
M299		9.6	8			
M300						
M301	II	10.4	8	壺体部、壺底部	中央にI型木棺	
M302		7.5	6			
M303		9.5	8		中央I基	
M304						
M305		5	4.8			
M306		7.6	6			
M307		12	7.1以上			
M308		7.6	3.7			
M309						
M310						
M311						
M312						
M313						
M314	II	11.2	6.8	広口壺		底部非残存
M315						
M316						
M317	IV	9	8.8	壺底部	中央I基	
M318		8.7	3.1以上			

M319		9.5	7.6		中央に木棺、周囲に木棺2	空間占有型
M320	Ⅲ	10.3	7.1	広口壺2		広口壺1のみ底部非残存
M321						
M322	Ⅱ	7.5	5	直口壺		
M323		5.8	4.8			
M324	Ⅲ	8	6.2	受口壺	中央2基	空間占有型
M325		4	3.6		中央Ⅱ型1基(朱)、周囲に2基	空間占有型
M326		19.7	13.3			
M327		7.3	6			
M328		6.9	5.2			
M329	Ⅲ	6	5.6	広口壺、受口壺、壺底部		
M330		6.2	6	鉢		時期不明
M331		6.7	6			
M332		7	6		端にⅡ型木棺2基	不明
M333		9.4以上	7以上		中央1基	
M334	Ⅲ	16.2	12.7	受口壺2、甕	中央1基	受口壺1のみ底部非残存
M335		8.5	7.8			
M336		6	5			
M337		10.6	8	壺底部	中央木棺1基	
M338		10.5	9.6			
M339		8.6	7.2			
M340	Ⅲ	11.3	10	壺体部		
M341	Ⅲ	11.7	10.3	受口壺2、壺底部		
M342	Ⅲ	16.7	14.3	広口太頭壺、受口壺、壺底部4		受口壺底部非残存
M343	Ⅲ	11.9	7.4	受口壺、壺体部	中央にⅡ型木棺、周囲に木棺2	空間占有型
M344		9.5	4.8			
M345		7.5	6	壺底部		
M346						
M347	Ⅱ?	14.6	14	甕口縁2、壺体部		
M348						
M349	Ⅲ	11.8	8.9	受口壺、直口壺、甕、壺底部2、脚	中央木棺1基	受口壺のみ底部残存
M350	Ⅲ	10.2	7.9	広口壺	中央木棺1基	
M351						
M352	Ⅱ	6.8	5.3	甕口縁部		
M353						
M354	Ⅲ	4.8以上	4.5以上	受口壺		
M355						
M356	Ⅲ	8	6.3	壺底部、壺体部	中央1基	
M357		10.6	8.3		中央4基	空間占有型
M358						
M359						
M360						
M361						
M362		5	4.7			
M363	Ⅱ	9.7	6.6	壺底部、直口壺、甕	中央1基	底部非残存
M364	Ⅲ	8.4	5.7	直口壺		底部非残存
M365		4.2	3.7			
M366	Ⅲ	5.8	5.3	鉢、壺頸部2、甕口縁部、鉢	中央1基	
M367	Ⅲ	10	7.6	受口壺2、壺底部、甕口縁部	中央1基	受口壺1のみ底部非残存
M368						
M369		7.5	4.3			
M370		12.1	11			
M371		10.6	6.8			
M372		4.9	2.4			
M373		11.7	9.6			
M374		10	5.6以上			
M375	Ⅲ	5.7	5.2	受口壺2		底部非残存
M376		7.5	4.2以上			
M377		13	11.5			
M378		7以上	6.4			
M379		13.2	10.5			
M380						
M381						
M382		10.4	6.8			
M383		7.7	5.8			
M384		4.3	4.1			
M385		8.2	5.5			
M386	Ⅲ～Ⅳ	5以上	4.5	受口壺、高杯		
M387	Ⅲ	9.7	7以上	受口壺、広口壺		
M388	Ⅲ	10	5.5	壺体部		底部非残存
M389		6	5.4			
M390		8.8	7.2			
M391		4.5	3.9			
M392	Ⅳ	6.1	3.3	甕		底部非残存
M393		7.4	3.5			
M394						
M395						
M396	Ⅳ	7	5	甕、直口壺、壺底部		

M397							
M398	III	16.8	11.8	甕、広口壺口縁部		中央木棺1基	
M399		5.7	4.5			中央木棺1基	
M400	IV	8.4	7	広口壺、直口壺2、甕2			甕1のみ底部なし
M401		3.3	3.2				
M402	IV	7.5	5.5	細頸壺			
M403	II	7.5	6.7	広口壺			底部非残存
M404		4	3.5				
M405	IV	9	5.4	直口壺、受口壺2、壺体部2、水差、甕、高杯		中央1基、端1基	空間占有型
M406	IV	9.5	3.5以上	直口壺2			底部非残存
M407		8.8	4.8				
M408		12.5	5.8				
M409	II	18.6	10.8	壺体部			
M410	IV	6.1	5.2	細頸壺、台付鉢、甕	細頸壺		
M411		9.4以上	5.5				
M412		8.9以上	6.5	壺底部			
M413	IV	4.5以上	2.5	甕口縁部、直口壺			底部非残存
M414	III	7.5以上	6以上	直口壺			
M415	II	6.5	5.5以上	直口壺、壺体部			
M416	IV	9.5	8	細頸壺、台付甕、受口壺？			甕のみ底部残存
M417		8	6.3			中央1基	
M418		6.8	6.2			中央2基、周辺1基	不明
M419		5.5	5				
M420	IV	10.6	5.3	広口壺、直口壺			
M421	IV	5.5	4.8	壺体部、高杯			
M422	IV	11	5.6	受口壺、細頸壺、甕		中央にII型木棺1基	
M423	IV	11	6.5	細頸壺			
M424	III	7.2	6.8	甕片、壺片			
M425		8.4					
M426		8.5	8.3				
M427		10.5	6.5				
M428		10.9	9.5				
M429							
M430							
M431		9.6	8				
M432		13.1	11.1	甕、受口壺、高杯			
M433	IV			直口壺	不明		
M434		8.2	4.8				
M435	IV			甕、受口壺、水差			
M436	III			甕			

表29 尾張地域（朝日遺跡）の方形周溝墓

愛知県埋蔵文化財センター1982・1994『朝日遺跡』Ⅲ～Ⅴ、Ⅵ						
方形周溝墓	時期	墳丘規模(m)	供献土器	穿孔	溝形態	備考
SX001						
SX002						
SX003						
SX004						
SX005	高蔵式	17	土器		四隅切れ	
SX006	貝田町式？	15			四隅切れ	
SX007	貝田町式？	10.3			四隅切れ	
SX008	貝田町式？	6.5			四隅切れ	
SX009	貝田町式？	6.7			四隅切れ	
SX010	貝田町式？	7			四隅切れ	
SX011	貝田町式？	7.5	6.8		四隅切れ	
SX012	貝田町式？	4.7			四隅切れ	
SX013						
SX014	貝田町式	6.8	広口壺3	広口壺	片隅切れ	
SX015						
SX016						
SX017	貝田町式	14.2	細頸壺		四隅切れ	
SX018						
SX019						
SX020						
SX021						
SX022	貝田町式？					
SX023						
SX024						
SX025						
SX026						
SX027						
SX028						
SX029						
SX030	朝日式		7.6		四隅切れ	中央第11号方形周溝墓
SX031	朝日式	4.5	4.3		四隅切れ	中央第10号方形周溝墓
SX032	朝日式		6		四隅切れ	中央第9号方形周溝墓
SX033	朝日式	7.5	6.2 壺		四隅切れ	
SX034	高蔵式				四隅切れ	

SX035	朝日式				四隅切れ	
SX036	朝日式			壺	四隅切れ	
SX037	朝日式				四隅切れ	
SX038	朝日式	8			片隅切れ	
SX039	朝日式	11.5	9.8		四隅切れ	中央第8号方形周溝墓
SX040	朝日式	9.4	8.3		四隅切れ	
SX041						
SX042	朝日式			壺	四隅切れ	
SX043						
SX044						
SX045	朝日式	5			四隅切れ	
SX046	朝日式	5.1	4.3		四隅切れ	中央第7号方形周溝墓
SX047						
SX048	貝田町式	24	19	器台	四隅切れ	大型
SX049		3.8	3.4		四隅切れ	
SX050	貝田町式?		2.9		四隅切れ	
SX051	貝田町式?		5.3		四隅切れ	
SX052	貝田町式?	4.4			片隅切れ	
SX053	貝田町式?	3.8	3.8		片隅切れ	
SX054	貝田町式?	3.2			四隅切れ	
SX055	貝田町式?	3.8			四隅切れ	
SX056						
SX057	朝日式	28	23	無頭壺片	四隅切れ	大型
SX058						
SX059						
SX060	朝日式?				四隅切れ	
SX061	朝日式		9.3		四隅切れ	
SX062	貝田町	6.5	6	壺	四隅切れ	
SX063	貝田町				四隅切れ	
SX064	貝田町	6.5	5.3		四隅切れ	
SX065						
SX066						
SX067	朝日式	15.6	12.5	鉢	四隅切れ	
SX068						
SX069						
SX070	朝日式	5.5	5.2		四隅切れ	
SX071	朝日式?	5.2			四隅切れ	
SX072	朝日式	7	5.2		四隅切れ	
SX073						
SX074	貝田町式	3.8	2.9	細頸壺	四隅切れ	
SX075	貝田町式		6.5	鉢	四隅切れ	
SX076	貝田町式	5.6			四隅切れ	
SX077						
SX078	貝田町式		18.2	細頸壺	四隅切れ	
SX079						
SX080	朝日式	6.7	6.1	壺、壺	四隅切れ	
SX081	貝田町式	4.1		細頸壺	四隅切れ	
SX082	貝田町式?	7.6	7		片隅切れ	
SX083						
SX084	高蔵式	12.5		細頸壺	片隅切れ	
SX085	貝田町式	6.5	10	広口壺、細頸壺、壺	片隅切れ	北部第2号方形周溝墓
SX086	貝田町式		8.5	細頸壺2、高杯2、他	片隅切れ	北部第1号方形周溝墓
SX087	貝田町式		7.5		片隅切れ	
SX088	貝田町式			細頸壺、壺	片隅切れ	中央第3号方形周溝墓
SX089	貝田町式	15		細頸壺、広口壺2、壺	片隅切れ	中央第1号方形周溝墓
SX090	貝田町式	6.2	5.8	壺	四隅切れ	
SX091	貝田町式	8.8		細頸壺、広口壺	片隅切れ	中央第4号方形周溝墓
SX092	貝田町式	7			四隅切れ	
SX093	貝田町式?	7.5			四隅切れ	中央第5号方形周溝墓
SX094	貝田町式	5.8		細頸壺	四隅切れ	中央第6号方形周溝墓
SX095	貝田町式?	10.6			四隅切れ	
SX096						
SX097	朝日式		9.7		四隅切れ	中央第13号方形周溝墓
SX098	朝日式?	8.8	8		四隅切れ	中央第12号方形周溝墓
SX099						
SX100	貝田町式		7.8		片隅切れ	
SX101						
SX102	欠山式			壺2	片隅切れ	
SX103	欠山式?		6.2	壺	片隅切れ	
SX104	貝田町式	10	8	細頸壺3、円窓付壺、壺	片隅切れ	
SX105	山中式		8.5	広口壺等多数	片隅切れ	主体部有?、土器棺
SX106	山中式	8.9	7.9	壺2、高杯	片隅切れ	
SX107	山中式			壺、台付壺、蓋など	片隅切れ	
SX108	山中式	5.6		高杯2、脚付鉢、鉢	片隅切れ	
SX109	山中式	5.5	5.4	台付鉢、壺片	片隅切れ	土器棺4
SX110	山中式	11	10.5	壺2、脚付鉢2	片隅切れ	土器棺5
SX111	山中式	9.2	8.5	壺7、高杯、脚付鉢	片隅切れ	主体部有?
SX112	山中式			壺3、脚付鉢	片隅切れ	
SX113	山中式	9.7		壺2、高杯、台付壺	片隅切れ	
SX114	山中式			鉢、壺	片隅切れ	土器棺
SX115	高蔵式			壺	片隅切れ	

SX116	高蔵式			高杯2、壺、円窓付壺		片隅切れ	主体部有？
SX117	山中式			広口壺	広口壺	片隅切れ	主体部4以上、人骨3体
SX118							
SX119							
SX120	朝日式			壺		四隅切れ	
SX121	朝日式	8.5	5.9			四隅切れ	
SX122	朝日式					四隅切れ	
SX123							
SX124			6.5			四隅切れ	中央に主体部
SX125							
SX126	朝日式		5.7			四隅切れ	
SX127							
SX128							
SX129							
SX130							
SX131							
SX132							
SX133							
SX134	朝日式	6.6		長頸壺		四隅切れ	
SX135	貝田町式	6.7	5.7			四隅切れ	
SX136	朝日式			長頸壺		片隅切れ	
SX137							
SX138							
SX139	朝日式	10.4	7.8	長頸壺		片隅切れ	
SX140	西志賀式	5				四隅切れ	土器棺
SX141	貝田町式？	8.4	7.8			片隅切れ	
SX142	朝日式		5.2			片隅切れ	土器棺
SX143	貝田町式			細頸壺		四隅切れ	
SX144	貝田町式			壺、高杯		四隅切れ	
SX145	貝田町式		5.4			四隅切れ	
SX146	貝田町式			壺2		片隅切れ？	
SX147	貝田町式	9	8	細頸壺5		片隅切れ	
SX148	欠山式	8		壺、器台2		片隅切れ？	
SX149	山中式	8.4	8.5	壺4		片隅切れ？	
SX150							
SX151	高蔵式	7.9				片隅切れ	
SX152							
SX153	高蔵式	9.5		細頸壺		片隅切れ	土器棺
SX154							
SX155							
SX156							
SX157							
SX158	山中式？	7.6	7.7	高杯		片隅切れ	
SX159	高蔵式	13.5	12.2			片隅切れ	中央に主体部？、土器棺
SX160	朝日式	11.3	7.9	壺		四隅切れ	
SX161	高蔵or 山中式			壺		片隅切れ	
SX162	山中式	8.8	8.7	壺、高杯4	高杯	片隅切れ	
SX163	朝日式	7.3	5.7	壺片		四隅切れ	
SX164	朝日式		6.8	無頸壺、長頸壺	無頸壺	片隅切れ	
SX165	朝日式？	6	5.2			四隅切れ？	
SX166	山中式			壺2		四隅切れ	
SX167	朝日式？	5.4	3.7			四隅切れ	
SX168	高蔵式					片隅切れ	中央に主体部？、土器棺5
SX169							
SX170	朝日式		3.3			四隅切れ	
SX171							
SX172	朝日式	8.4	6.5			四隅切れ	
SX173	朝日式					四隅切れ	
SX174	朝日式	6				四隅切れ	
SX175	朝日式					四隅切れ	
SX176							
SX177							
SX178	山中式	8.2	8.2			片隅切れ	中央に主体部？
SX179	山中式	10	8.5	壺4、高杯	壺	片隅切れ	中央に主体部？、土器棺
SX180	山中式	8	8	広口壺	広口壺	片隅切れ	中央に主体部？
SX181							
SX182	朝日式	8.5		長頸壺		四隅切れ	
SX183	山中式	8.5	8	広口壺、台付壺等	広口壺	片隅切れ	中央に主体部？
SX184	山中式	9		無頸壺、長頸壺		片隅切れ	
SX185	山中式	9.5	8	壺4、脚付鉢、壺		片隅切れ	中央に主体部？、土器棺5
SX186	山中式	9	8	広口壺		片隅切れ	
SX187							
SX188							
SX189	朝日式			壺		片隅切れ	土器棺
SX190	貝田町式？	9.2				片隅切れ	
SX191	山中式？	8.5	7.2			片隅切れ	
SX192	山中式	8.5	8	細頸壺、台付壺、手摺鉢	台付壺	片隅切れ	中心に主体部、土器棺
SX193	貝田町式	4.5		細頸壺	なし	四隅切れ	
SX194	山中式			広口壺など10点以上	なし	片隅切れ	主体部有？
SX195	貝田町式			細頸壺2	細頸壺	片隅切れ	

SX196	貝田町式			細頸壺	なし	片隅切れ	
SX197							
SX198							
1号台状遺構	貝田町式	12.2	2.9				
2号台状遺構	貝田町式	6	3.9				
3号台状遺構		10	4				
4号台状遺構	貝田町式	5.2	2.9				
SZ351	高蔵?~			細頸壺4以上			
SZ352・353	高蔵~	12.7	9	広口壺、細頸壺			
SZ354・355	高蔵~		4.4	小型壺			
SZ356・357	高蔵~	9.4	7.3	細頸壺、脚台部、広口壺、他			円窓付壺2点 拡張型
SZ358・359	高蔵~	6.4	3.4	細頸壺、広口壺、甕			
SZ360	高蔵~			細頸壺			
SZ361	高蔵~	7.8		鉢			溝中埋葬
SZ362	高蔵~						
SZ363	高蔵~		4.8	甕			
SZ364	高蔵~			甕3、無頸壺			

注) ①河内地域などの埋葬施設の番号については埋葬施設の種類ごとに報告書に記載された番号の若い順から任意に1から番号をつけた。

②河内地域のうち近畿自動車道建設に伴う諸調査にかかわる情報(亀井遺跡・瓜生堂遺跡ほか)については、揭示文献以外に、(財)大阪文化財センターほか『河内平野遺跡群の動態』各巻を参照した。